

○ **今日のテーマ**

「若きピカソは、どのように現実を直視し、新たな表現を生み出したのか。#01」

○ 簡単にオンライン用のお名前と地域など教えてください。

○ 「ピカソ」について何にか興味・関心ありましたらお聞かせください。

# ピカソの若き時代(1881-1916)・前期

1

誕生、そして  
画家としてスタート  
0~18歳  
1881~1899

- ・1881年0歳・アンダルシアの**マラガ港町**に生まれる。
- ・1892年11歳・**ア・コルーニャ美術学校**に父の申請で特別に入学。
- ・1894年13歳・初めての油絵作品を制作する。
- ・1894年14歳・バルセロナに引っ越し、**ラ・リョジャ美術学校**に入学。
- ・1896年・15歳「**初聖体拝領**」を描きバルセロナの美術工芸展に出品。
- ・1897年16歳・マドリードの**サン・フェルナンド美術アカデミー**に入学。
- ・1898年17歳・バルセロナに戻る
- ・1899年18歳・**前衛芸術家たち**と会う。

2

青の時代  
19~22歳  
1900~1903

- ・1900年19歳・初めての**パリ滞在**・**パリ万博開催**
- ・1901年20歳・マドリードで前衛美術誌の編集者とイラストレーターを務める。**マックスジャコブ**と知り合う。
- ・**パリでカザジェマスが自殺**。**ロートレック**死去
- ・1902年21歳・バルセロナに戻る。10月から**パリ滞在**。
- ・1903年22歳バルセロナに戻り「**人生**」を制作。**ゴーギャンの死去**

3

バラ色の時代  
23~25歳  
1904~1906

- ・1904年23歳・**モンマルトル**の洗濯船に居を構える。**フェルナンド・オリヴェ**と恋仲になる。
- ・1905年24歳**アポリネール**と知り合う。
- ・1906年25歳・**イベリア彫刻**の展覧会に感銘する。
- ・**アンリ・マチス**や**アンドレ・ドラ**ンと知り合う・**セザンヌ**死去。

4

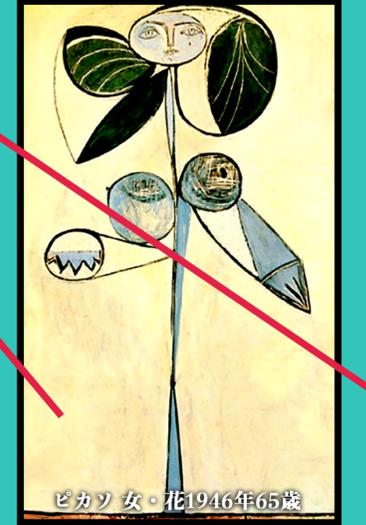
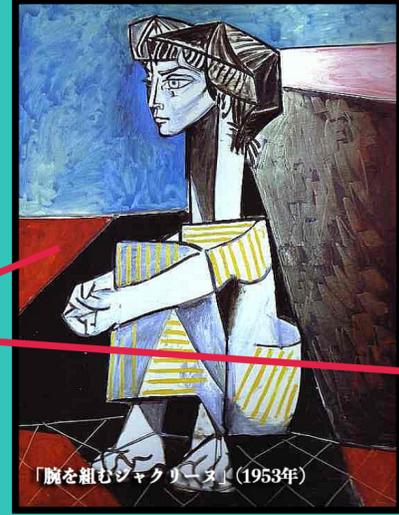
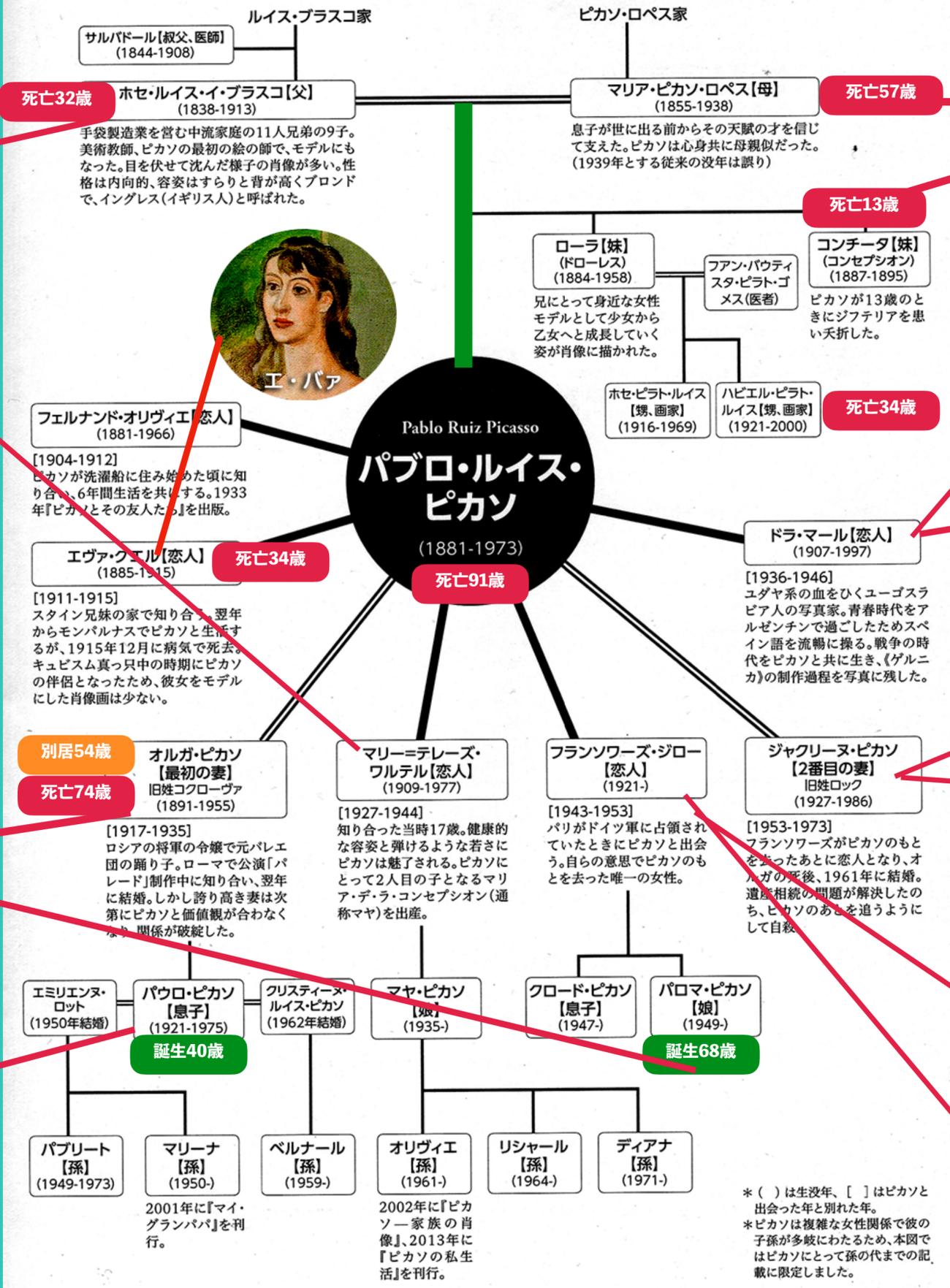
キュビズムの時代  
26~35歳  
1907~1916

- ・1907年26歳・「**アヴィニヨンの娘たち**」制作。**ブラック**と知り合い**キュビズム**の探究へ向かう。
- ・1908年27歳・**アンリ・ルッソー**を称える**晩餐会**をピカソのアトリエで開く。
- ・1909年28歳・**分析的キュビズム**が始まる。
- ・1911年30歳・**エヴァ**と知り合う。
- ・1912年31歳・初めての**コラージュ**作品を始める。
- ・1913年32歳・父**ホセ**が死去。**総合的キュビズム**が始まる。
- ・1915年34歳・恋人**エヴァ**が死去。

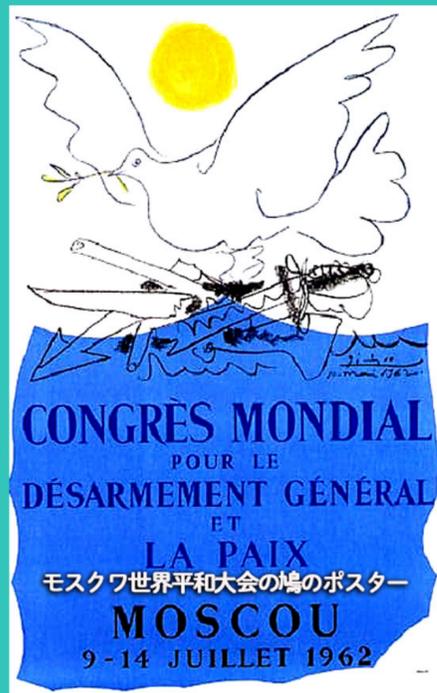
# ピカソの 家族関係



## ピカソの家系・人間関係図



マラガ県の県都である。地中海沿岸のリゾート地であるコスタ・デル・ソルの中心に当たる。



マラガ出身の天才芸術家ピカソが11歳になるまで住んでいた家のある場所、つまり彼の遊び場だったのです。名前はラ・メルセー広場、彼が3歳まで住んでいた生家は現在、ピカソ生家博物館となっています

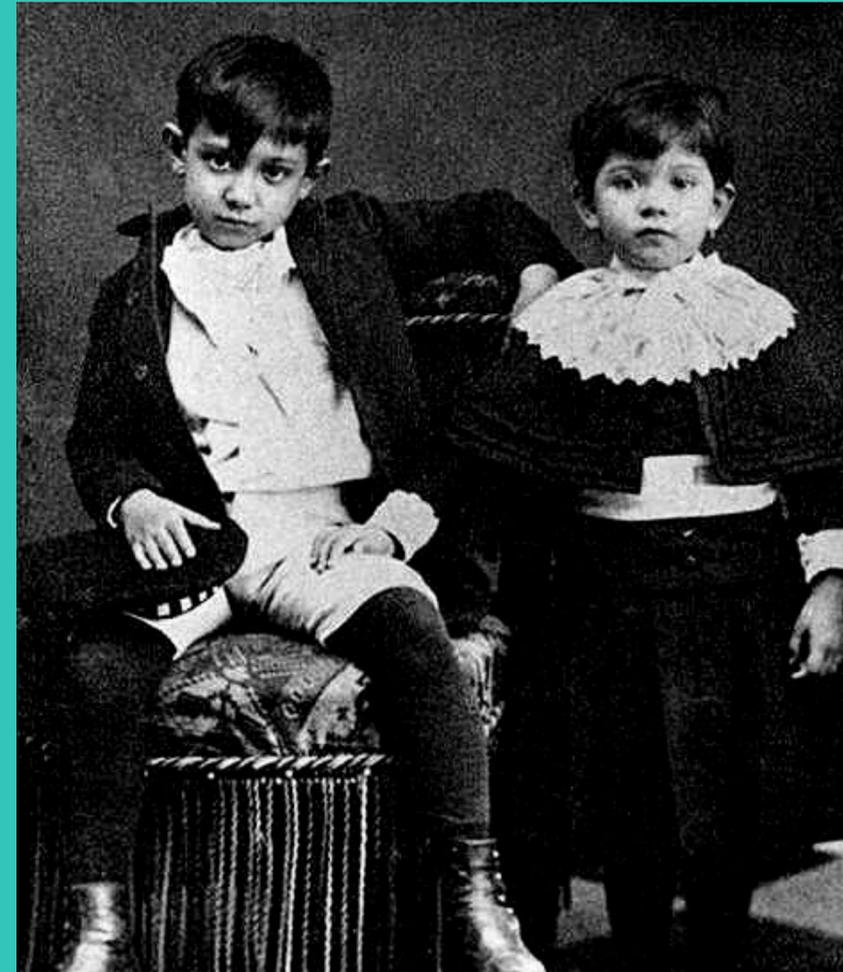
マラガ

ピカソ生家博物館

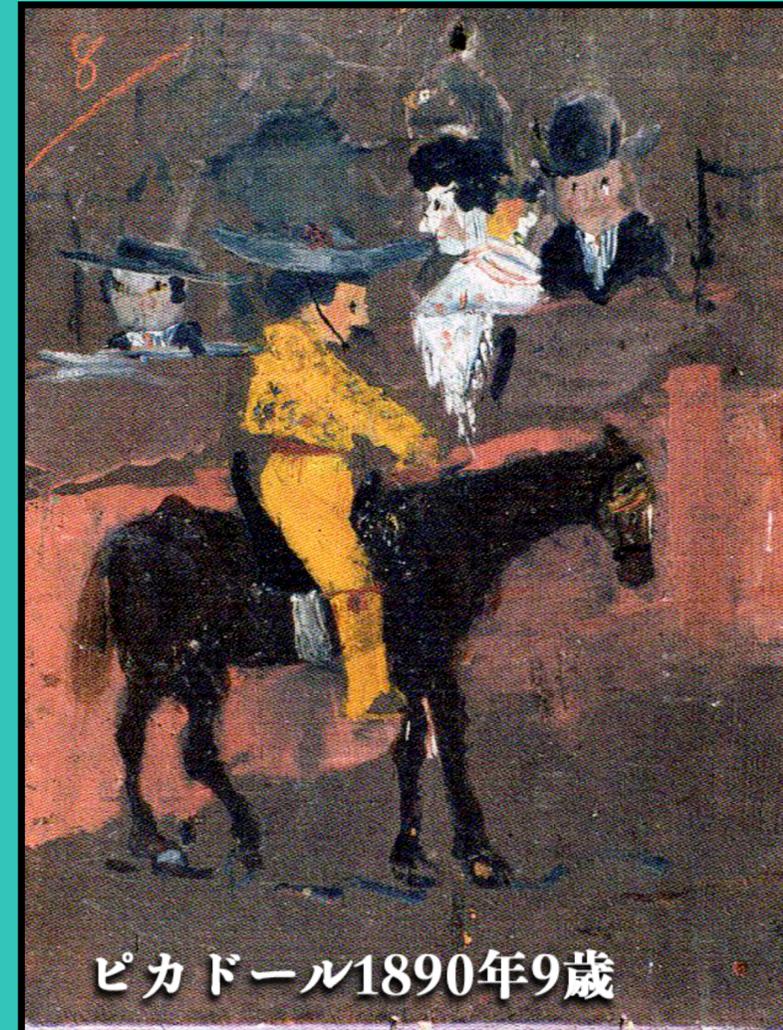
# ①-1(1881~1899年・0歳~18歳)誕生、画家としてスタート

またたく間にアカデミックな技法を習得していく早熟の天才画家

○ 初聖体拝領1896年15歳・・・パブロ・ルイス・ピカソは1881年10月25日、スペイン南部の港町マラガに、父ホセ・ルイス・ブラスコと母マリア・ピカソ・ロペスの長男として生まれる。生まれた赤ん坊は死産と誤認されたため、テーブルの上に放置されたが、叔父である医者サルバドールの適切な処置で蘇生し、元気な産声をあげた。母マリアによると、アゴ教区政会で洗礼を受けた息子パブロは、言葉で覚えるより先に絵を描いていた。



7歳のピカソと妹のローラ



ピカドール1890年9歳

はじめての聖餐 1895年 14歳

○ 《ピカドール》1890年頃・・・ピカソが9歳の頃に描いた油彩。マラガの港を描いた風景画とともに、現存する最も古い油彩のひとつ。これ以降、ピカソは闘牛の主題を繰り返し描くことになる。

# ①-2(1881~1899年・0歳~18歳)誕生、画家としてスタート



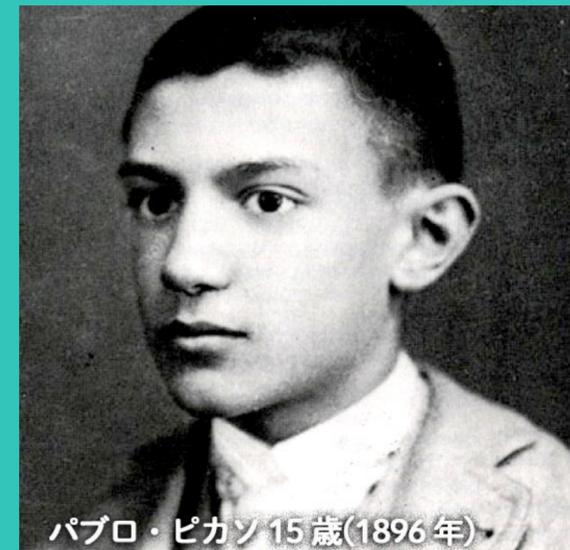
裸足の女の子 1895年(14歳) パブロ・ピカ

○ 《描いやで時の一タかかもなく死にこの出来事はピカソにとって、「死」が生涯のライトモチーフ(頻繁に描かれる主題)となるきっかけのひとつとなる。

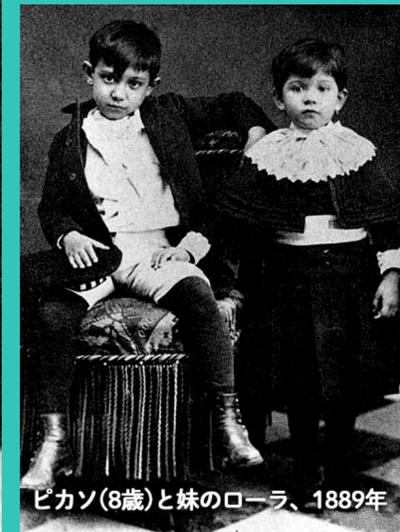


ピカソの生まれたマラガの家

## ピカソの家と生き立ち



パブロ・ピカソ 15歳(1896年)



ピカソ(8歳)と妹のローラ、1889年

○パブロ・ルイス・ピカソは1881年10月25日、スペイン南部の港町マラガに、父ホセ・ルイス・ブラスコと母 MARIA・ピカソ・ロペスの長男として生まれる。生まれた赤ん坊は死産と誤認されたため、テーブルの上に放置されたが、叔父である医者サルバドールの適切な処置で蘇生し、元気な産声をあげた。母 MARIA によると、サンティ7歳のピカソと妹のローラ。筈アゴ教区教会で洗礼を受けた息子らパブロは、言葉で覚えるより先に絵を描いていた。

# ①-3(1881~1899年・0歳~18歳)ピカソの驚異的デッサン力

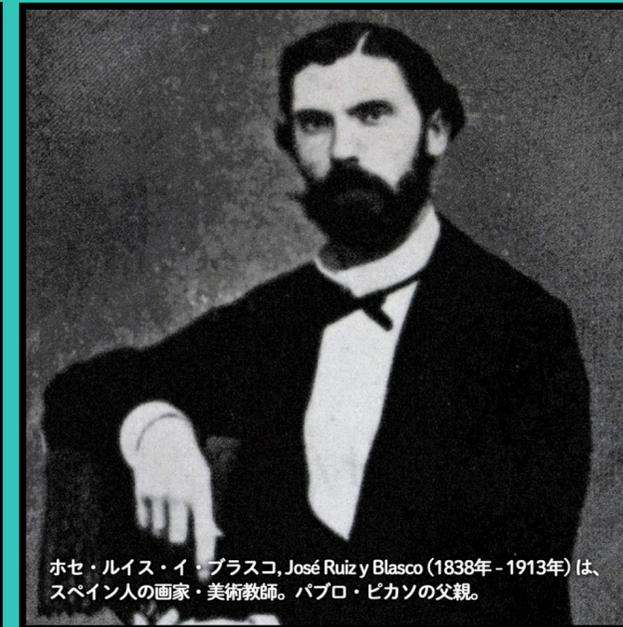
## ピカソ11歳のデッサン



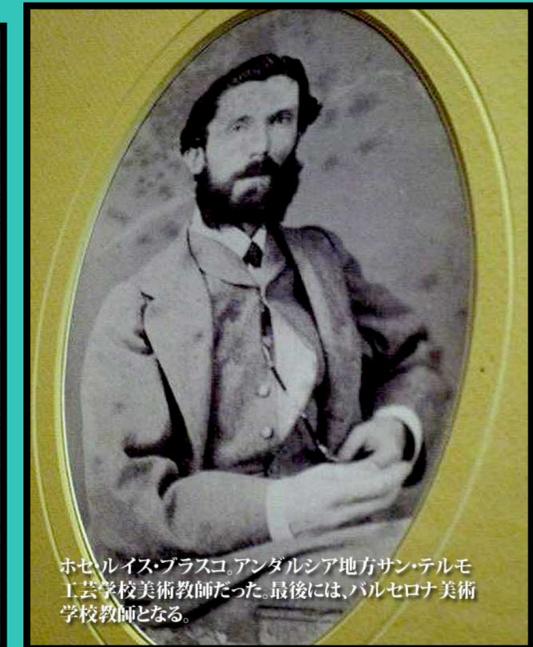
ピカソ11歳のデッサンの確かな明暗や形の捉え方、ピカソが間違いなく神童であったことを物語る素描。



1892年ピカソ11歳のデッサン



ホセ・ルイス・イ・ブラスコ, José Ruiz y Blasco (1838年 - 1913年) は、スペイン人の画家・美術教師。パブロ・ピカソの父親。



ホセ・ルイス・ブラスコ, アンダルシア地方サン・テルモ工芸学校美術教師だった。最後には、バルセロナ美術学校教師となる。

○1891年10歳の頃・・・父親がラ・コルーニヤのダ・グアルダ美術学校で新たなポストを提示されたため、家族そろって当地に転居せざるを得なくなった。ピカソは同美術学校に入学し、デッサン、人物素描、古代石膏像の模写などの授業を3年間受けた。この学校に通ったことによって、ピカソは初めてデッサンを学ぶここができた。ピカソにとってデッサンは、何を制作する場合でも役立つ実験手段として重要な役割を果たすようになる。

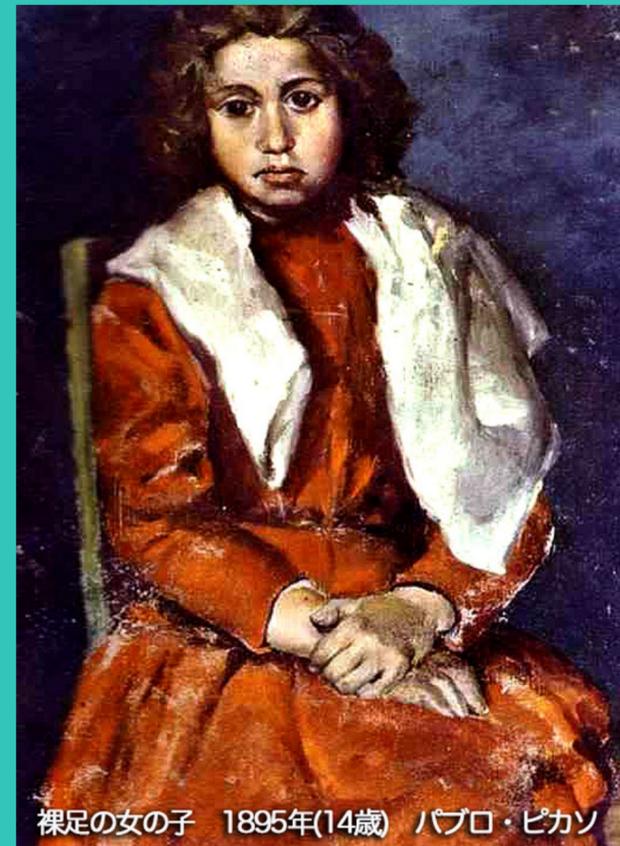
# ①-4(1881~1899年・0歳~18歳)ピカソの驚異的デッサン力



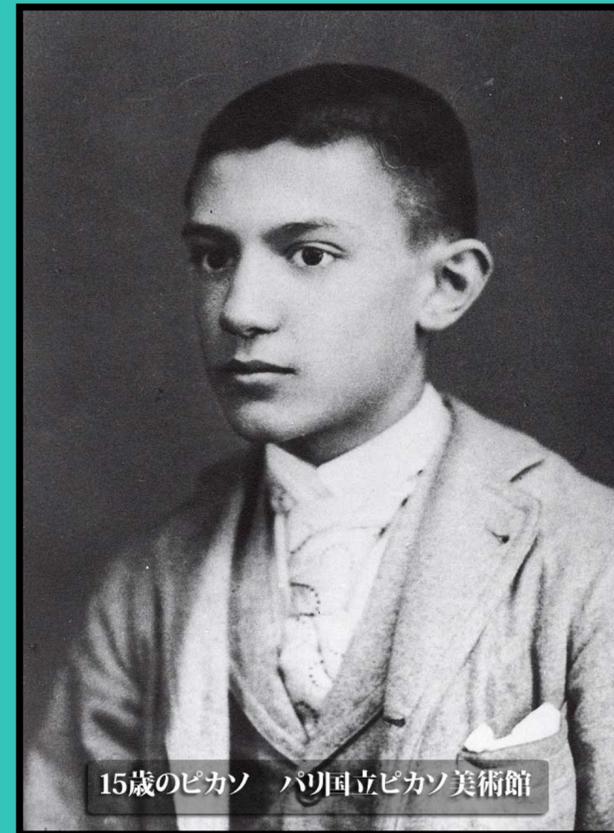
ピカソ ベレー帽の男 1895年



パブロ・ピカソ 《自画像》1896年(15歳)



裸足の女の子 1895年(14歳) パブロ・ピカソ



15歳のピカソ パリ国立ピカソ美術館

ピカソは、彼の最初の「パトロン」である叔父サルバドールから与えられたアトリエで、伝統的な技法を駆使して複数の肖像画を描いた。そのうちの《裸足の少女》(1895年)14歳や《ベレー帽の男》(同年)は、モデルの本質的な特徴を把握するピカソの能力を如実に示すものだ。イギリスの美術史家ジョン・リチャードソンはこの2作を、ピカソの最初の本格的な傑作であると評している。

# ①-5・(1881~1899年・0歳~18歳)・科学と慈愛



○ **科学と慈愛<1897年16歳>**・・・この作品は初期のアカデミックな大作(科学と慈愛)のための習作の一つである。この完成作のための油彩習作は4点知られているが、その中で本作品は最もサイズが大きく、最も完成作に近い構図になっている。黒いカーテンで仕切られた薄暗い部屋の片隅。ベッドには、左手を胸の上に置いて息も絶え絶えな蒼白な女性が横たわる。傍らに座る身なりの立派なひげの男性(医者)は時計を見ながら彼女の右腕の脈拍を診ている。ベッドの向こう側には白い頭巾と胸当てを着けた女性(修道女)が、横たわる女性を心配そうに見つめる小さな子供を左腕に抱え、皿にのせたカップに入る末期の水を右手でベッドの女性に差し出している。この作品では、脈を取るしかない医者の姿で「科学」を表し、末期の水を与える修道女の姿でキリスト教的「慈愛」を表現している。

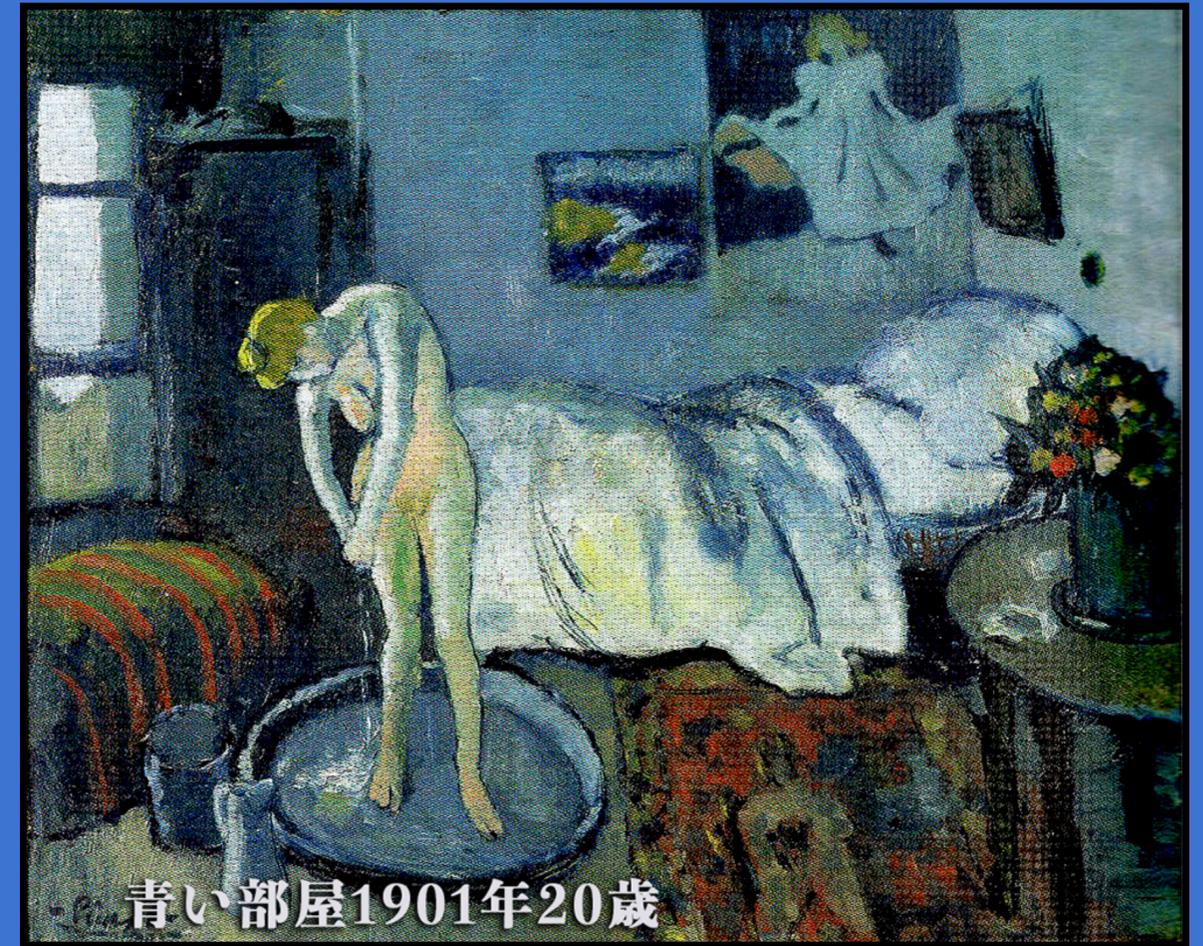
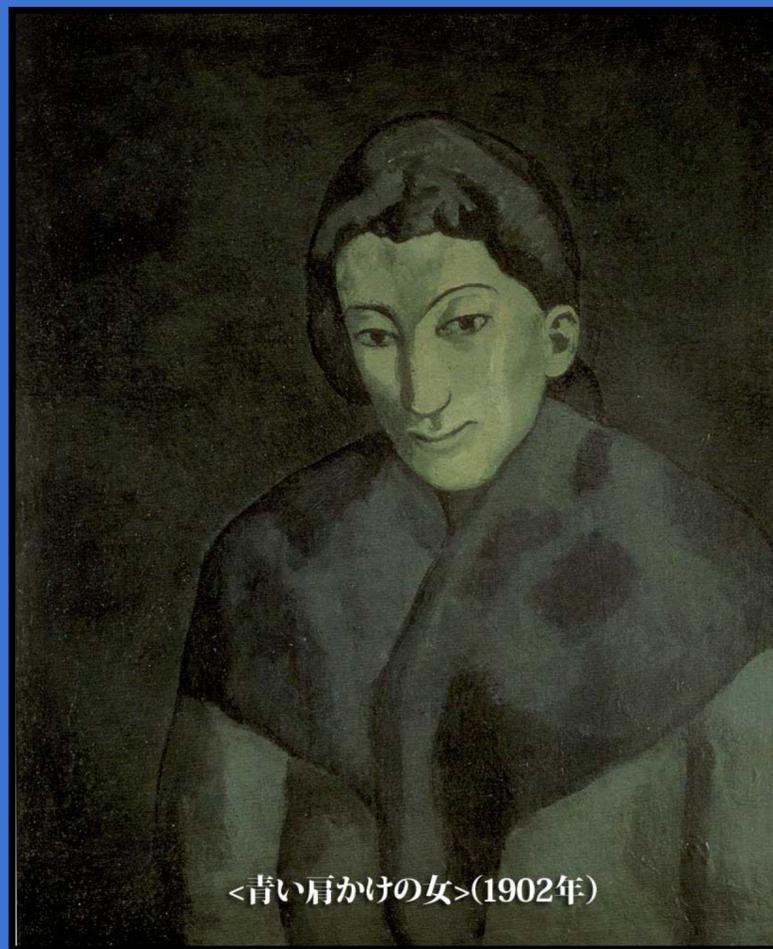
# 青の時代



○ 1904年(13歳)・・・ピカソはこの老朽化した建物に引っ越してきたばかりです。1907年(16歳)、エミール・グドーがそこで「アヴィニヨンの娘たち」を創設しました。とりわけ、ブランクーシ、モディリアーニ、ユトリロ、ピエール・マク・オルラン、マックス・ジェイコブ、ギョーム・アポリネール、アンドレ・サルモンに会います。

## ②-1・(1900~1903年・19歳~22歳)・青の時代

青春の感傷的な感受性があふれ、貧しさと絶望を青色に染め上げる



○ピカソは万博に出品された自分の作品《最期の瞬間》(科学と慈愛)を見るため、1900年10月19歳に初めてパリを訪れる。この街がもつ雰囲気ですっかり魅了されてしまい、モンマルトルに居を構えた1904年以降、長い歳月を「華の都」で過ごすことになる。パリに到着して間もなく、カタルーニヤ人画商マニヤックと契約を結び、ヴェルト・ヴェイユに3点のパステル画を売却、翌年にはヴォラールの画廊で展覧会を開いたピカソは、この芸術の都に自らの才能を開花させる可能性を見出したことだろう。家族の束縛を離れ、モンマルトルの歓楽街で自由を満喫しながら、ゴッホ、ゴーギャン、ロートレックを作品を研究し、そして貪欲に、新しい芸術洋式を吸収していく。

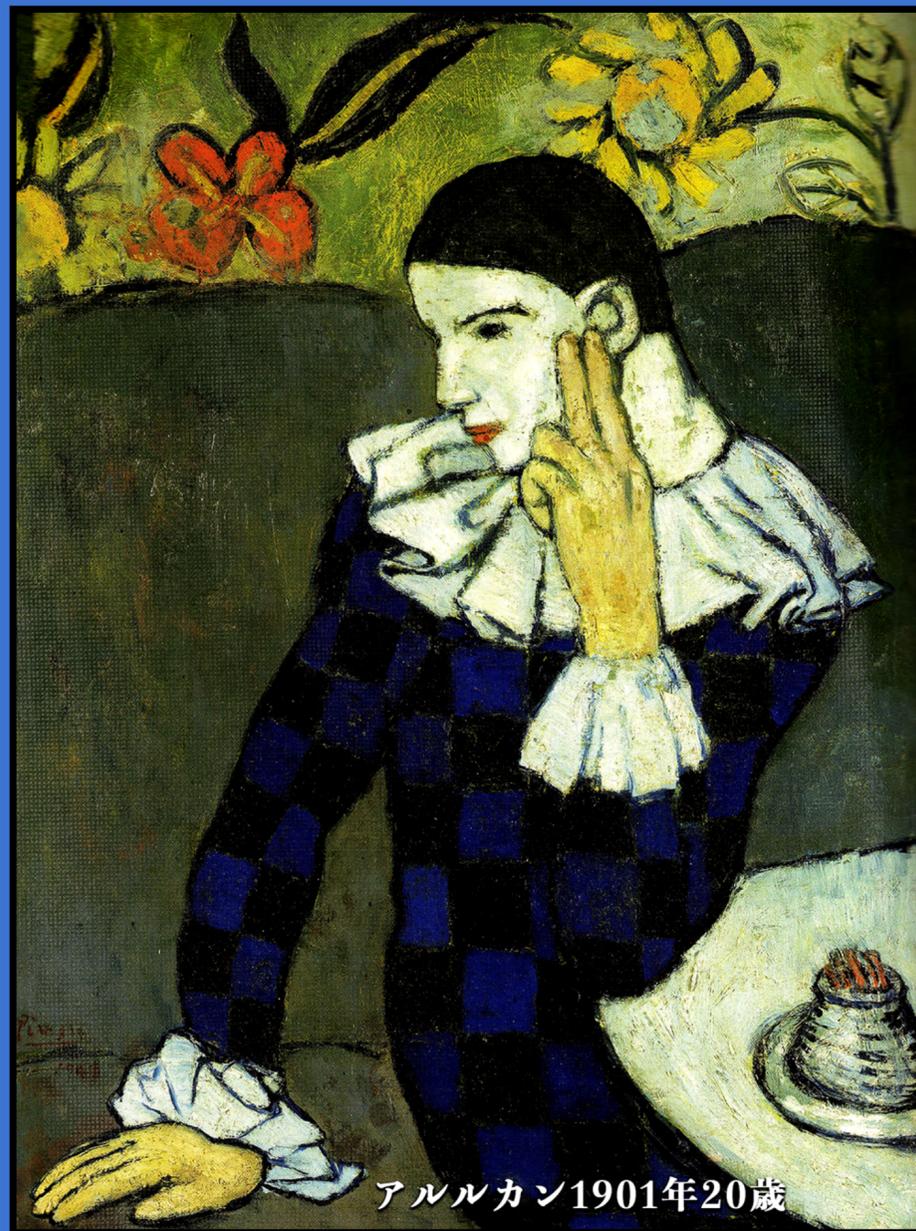
○《自画像》1901年21歳・・・1902年初頭、2度目のパリ滞在を終えたピカソは、この自画像を含む4、5点の油彩をバルセロナに持ち帰った。

○青い部屋1901年20歳・・・2度目のパリ滞在中、画商マニヤックと共有していた部屋。壁にはロートレックのポスター「メイ・ミルトン」が飾られている。この作品は別の肖像画に上描きされたものであることが判明している。

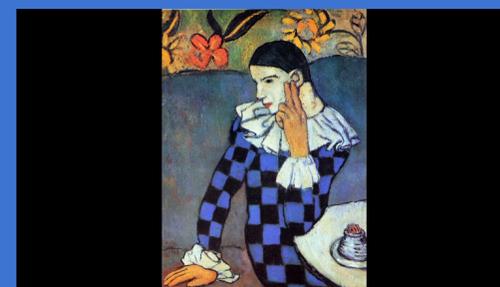
## ②-2・(1900~1903年・19歳~22歳)・アルルカン

### うつむく視線の先に何を見るか

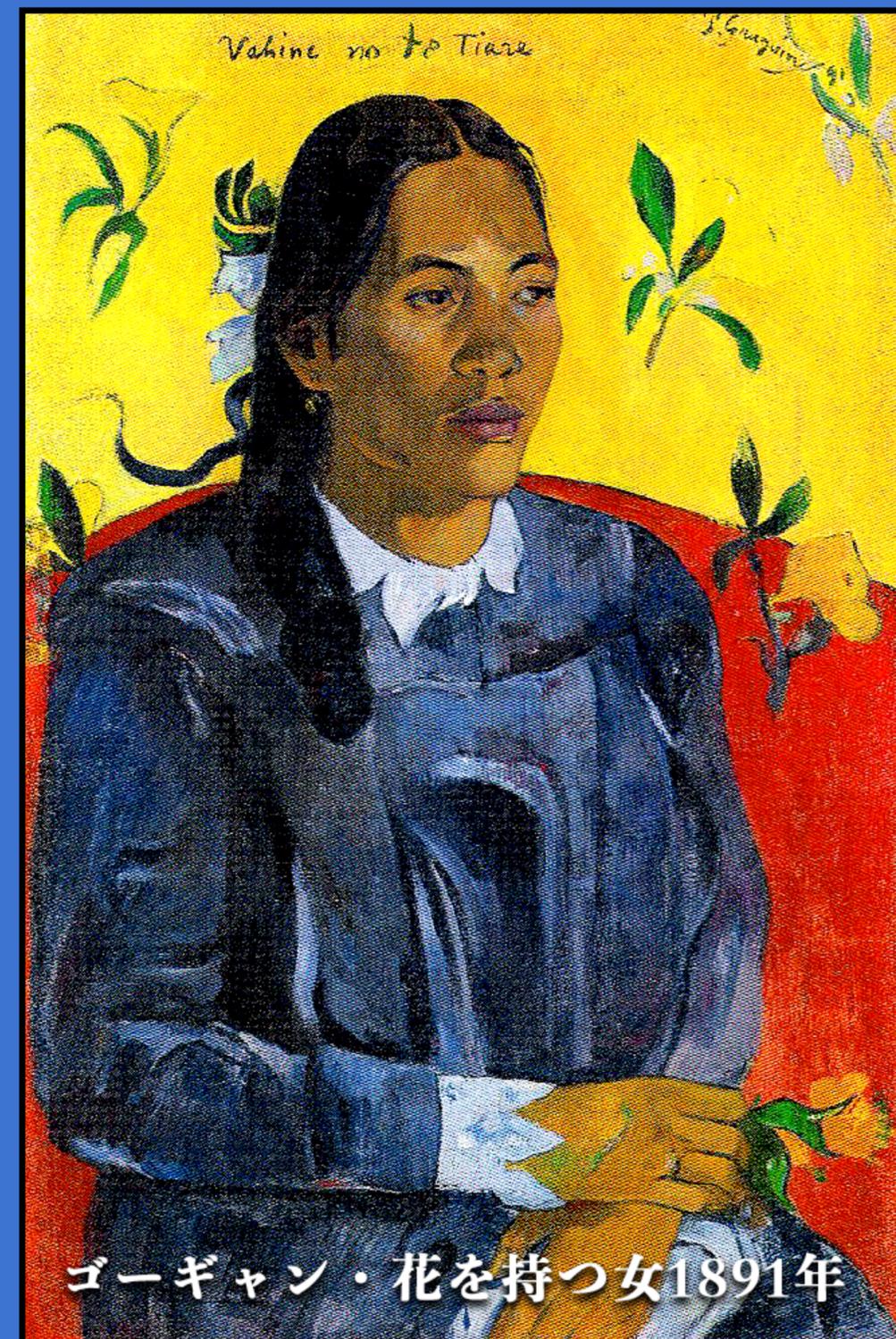
○道化は、古代ギリシアの時代から社会の矛盾や見せかけを告発し、ヒエラルキーの外側から社会を活性化する役割を担う。そして、ときに笑いものにされ、ときに恐れられてきた存在だった。社会の不条理に着目し、弱者に共感を寄せる「青の時代」のピカソ。そういう彼が、惰性的な日常を打ち破り、形骸化した道徳を笑い飛ばすアルルカンやピエロに魅了されたことは当然の成り行きでもあった。人物像の平面的な描き方は、ゴッヤンの作品から学び取ったものだ。この頃、ヴォラール画廊でゴッヤンの代表作《我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこに行くのか》を実見しており、友人パコ・ドゥリオも多数の作品を所有していた。ドゥリオはゴッヤンの様々な逸話をピカソに語り聞かせている。



アルルカン1901年20歳



○背後の壁紙やアルルカンの衣装は陰影による肉付けが施されていない。こうした平面的な処理は、ポスト印象派、とくにゴッヤン(1848-1903)から学び取ったものである。

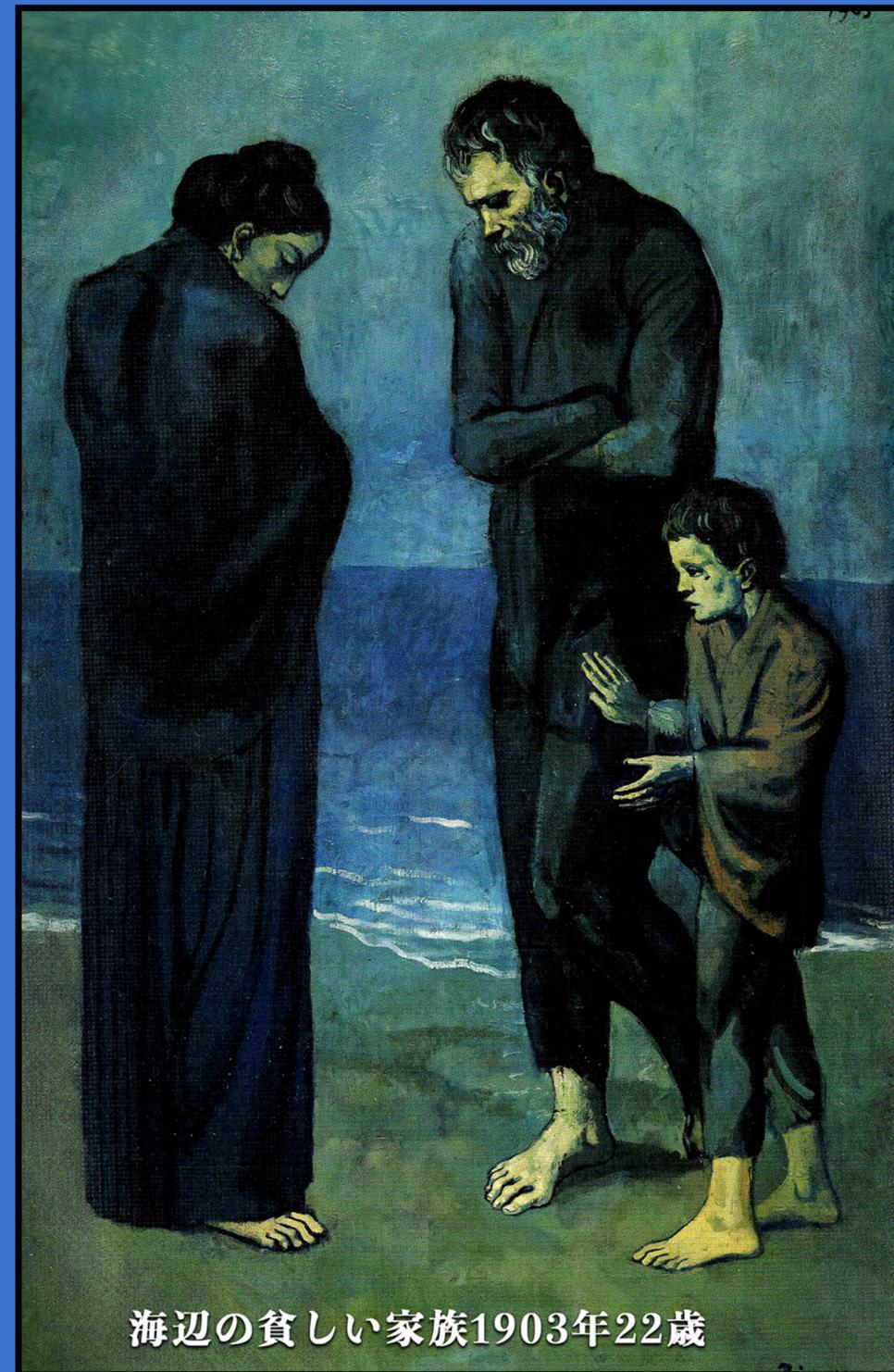


ゴッヤン・花を持つ女1891年

## ②-3・(1900~1903年・19歳~22歳)・海辺の貧しい家族

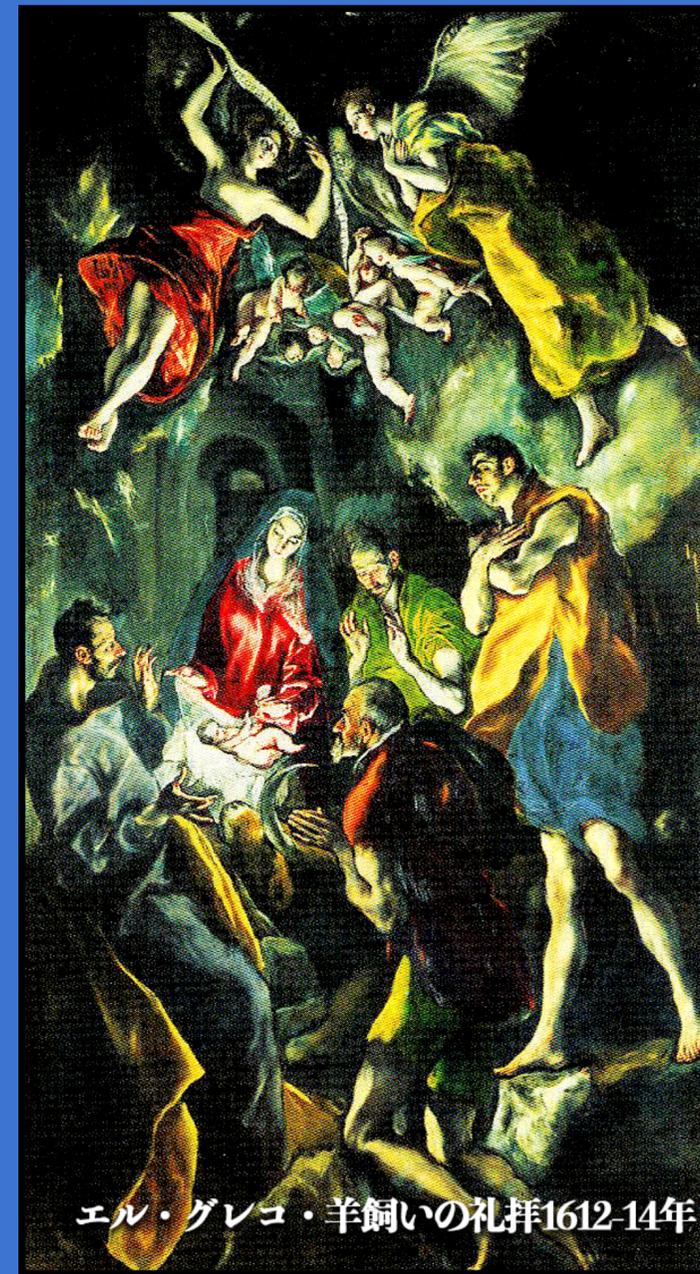
地中海を背景にした貧困と絶望

無理やり探して見つかった個性なんて偽物だ——ピカソの言葉



海辺の貧しい家族1903年22歳

○1903年1月、ピカソは3回目のパリ滞在を終え、バルセロナに戻る。青の時代の多くの作品に登場する海辺はこの地で見た青い地中海が舞台で、**漁師や中南米からの引き揚げ者の寓意**となった。また、青という色彩はバルセロナのムグルニズマ（前衛芸術運動）を代表する画家サンティアゴ・ルシニョールが好んだ色彩でもあった。**19世紀末から20世紀初頭のバルセロナでは急速な近代化が進められる一方で、その陰に不遇な弱者たちを大量に生み出した。**自らの身体を抱え込み、途方に暮れながら海辺に倅む家族には、そうした当時の社会背景も如実に反映されている。また、中世風の衣装や無駄な装飾を排除した表現には、**カタルーニヤのロマネスク彫刻やエル・グレコの影響を見て取ることができる。**

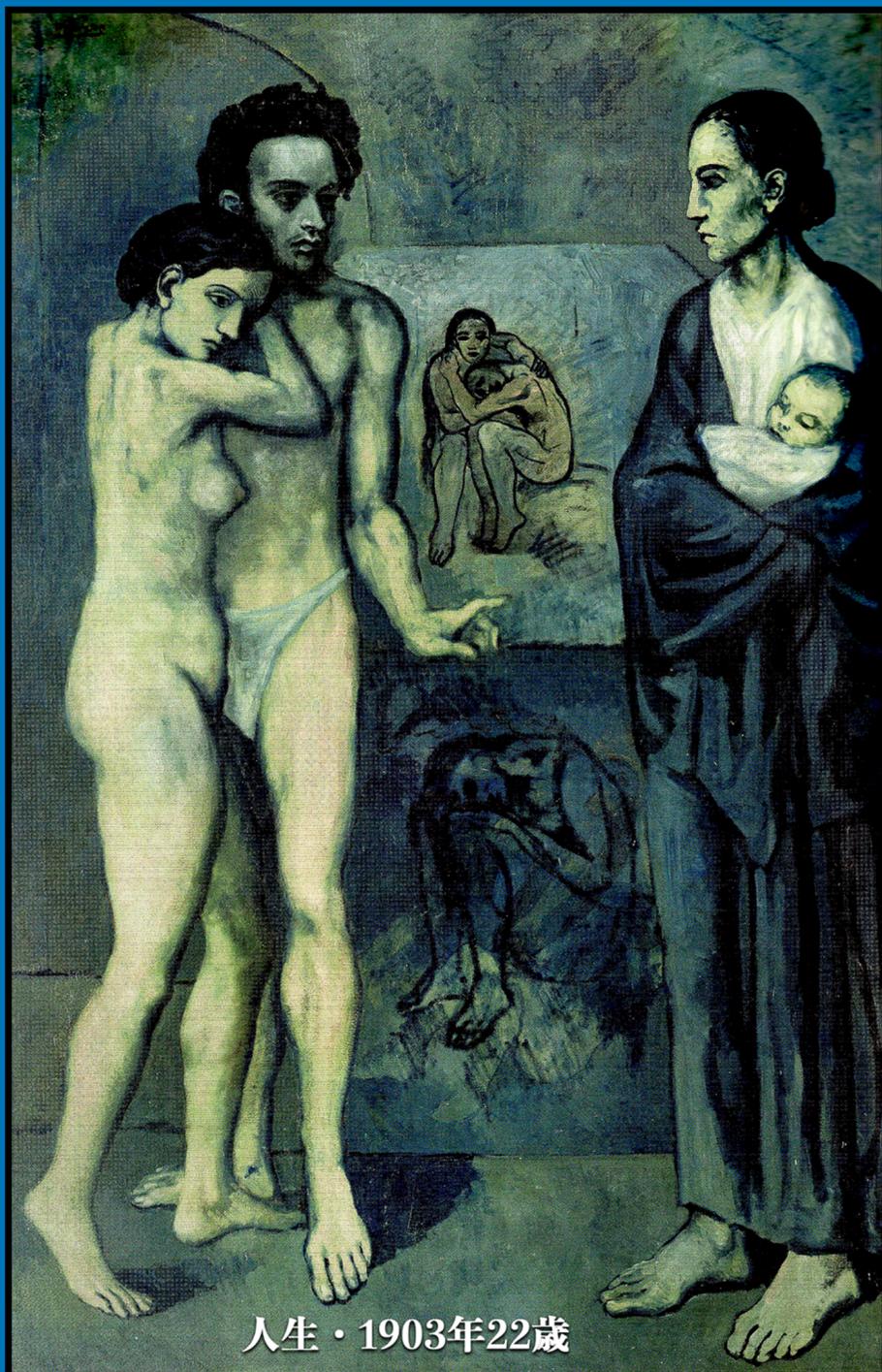


エル・グレコ・羊飼いの礼拝1612-14年

○**エル・グレコから得たもの**・・・19世紀後半から20世紀初頭にかけてエル・グレコ（1541-1614）が再評価された時代でもあった。カタルーニヤの進歩的な画家たちは、**エル・グレコに前衛の先駆者としての要素を見出し高く評価していく。**ピカソも、エル・グレコの縦に引き伸ばされた**プロポーション**や**ストローク（一筆分のタッチ）**の長い筆遣いを積極的に取り入れた。

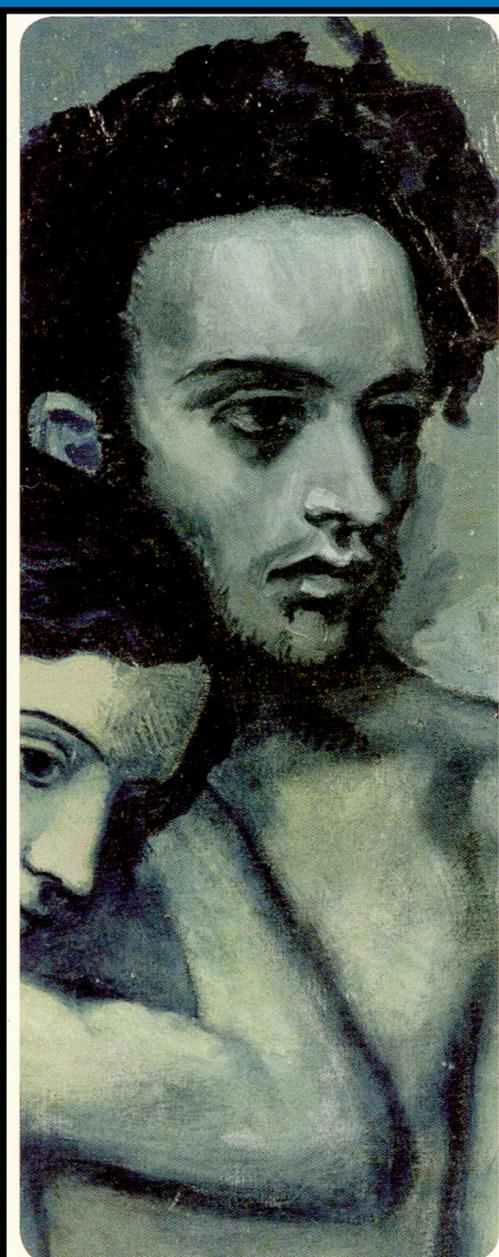
## ②-4・(1900~1903年・19歳~22歳)「人生」1903年

芸術は悲しみと苦悩の所産である。悲しみは瞑想を呼び、苦悩は人生の根源である。——ピカソの言葉



ジェルメヌ・ガルガーリョ

○「人生」・・・ピカソが自らタイトルを付けた、数少ない作品のひとつである。制作当時から、「**青の時代**」を代表する作品として高く評価されてきた。裸のカップルが表す性愛に**母子愛が対置**され、愛の裏側に存在する孤独や苦悩がイーゼルに立てかけられたキャンバスに描き込まれるという複雑な構成になつている。母子像はこの時期に繰り返し描かれたモチーフであり、**男女の性愛や画家のアトリエは生涯にわたって幾度となく描かれる主題**となる。そうした意味でも、この時代のピカソの**人生観や芸術観が凝縮された作品**といえる。



POINT ① 裸の男は誰？

習作ではピカソの自画像だった男性像が完成作では自殺したカザジェマスに代えられた。

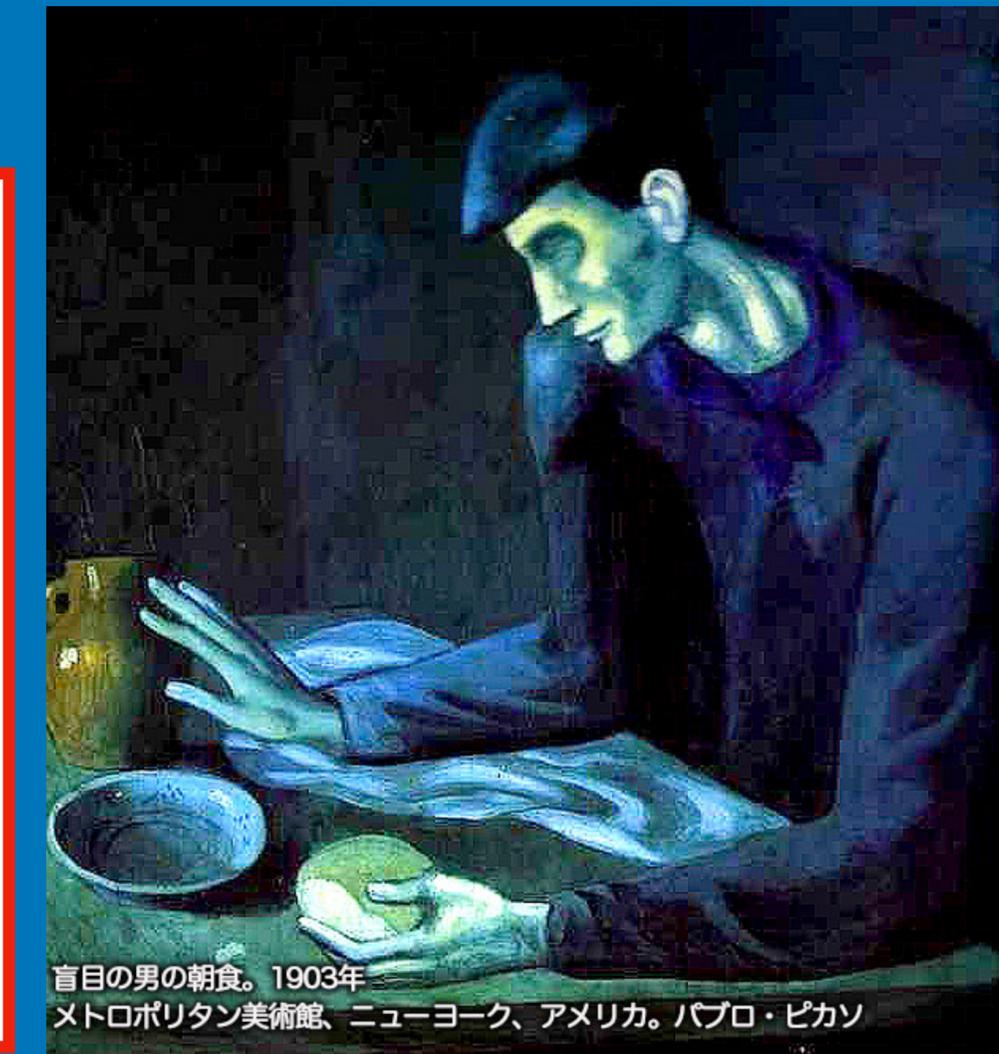
- **カザジェマスの死**・・・ピカソとアトリエを共有するほど親密な友人であった**カザジェマス**は、モデルの**ジェルメール**に**熱烈な恋**をする。しかし、カザジェマスが性的に不能であったことや**ジェルメール**が既婚者であったことから、この恋は**成就しない**。失恋を受け入れられないまま沈み込んでいくカザジェマスを元気付けるために、ピカソは彼をマラガへ連れて行くのだが、**カザジェマスの想いは募る**ばかりでなんの解決にもならなかった。愛想を尽かしたピカソはバルセロナに向けカザジェマスを送り出したあと、マドリードへ赴き、**新しい芸術雑誌の創刊に専念する**。しかし、カザジェマスはパリに舞い戻り、友人たちを集めての夕食中にピistolを取り出して自殺を遂げる。この事件は「**青の時代はカザジェマスとともに始まった**」と許されるほどの**衝撃**をピカソに与えた。

## 青の時代

### ○カサジェマスの死をきっかけ

に、始まった「青の時代」。前述のカサジェマスの死を題材とした作品以外は、社会の底辺に追いやられた弱者たち、生活に困窮した人々、物乞いや売春婦、寡婦、盲人、道化師。このような弱者に共感を寄せる作品を、ピカソは描き出しています。これは、ピカソが自ら身を置いていた貧困生活の中で、実際に身近で目にした社会の不条理を描き出したともいえます。

○「二姉妹」・・・梅毒に罹った売春婦を収容する監獄病院での売春婦と修道女をモチーフに描いた作品。当時、梅毒は治る見込みがない死に至る病でした。左が修道女、右が売春婦のようです。



盲目の男の朝食。1903年  
メトロポリタン美術館、ニューヨーク、アメリカ。パブロ・ピカソ

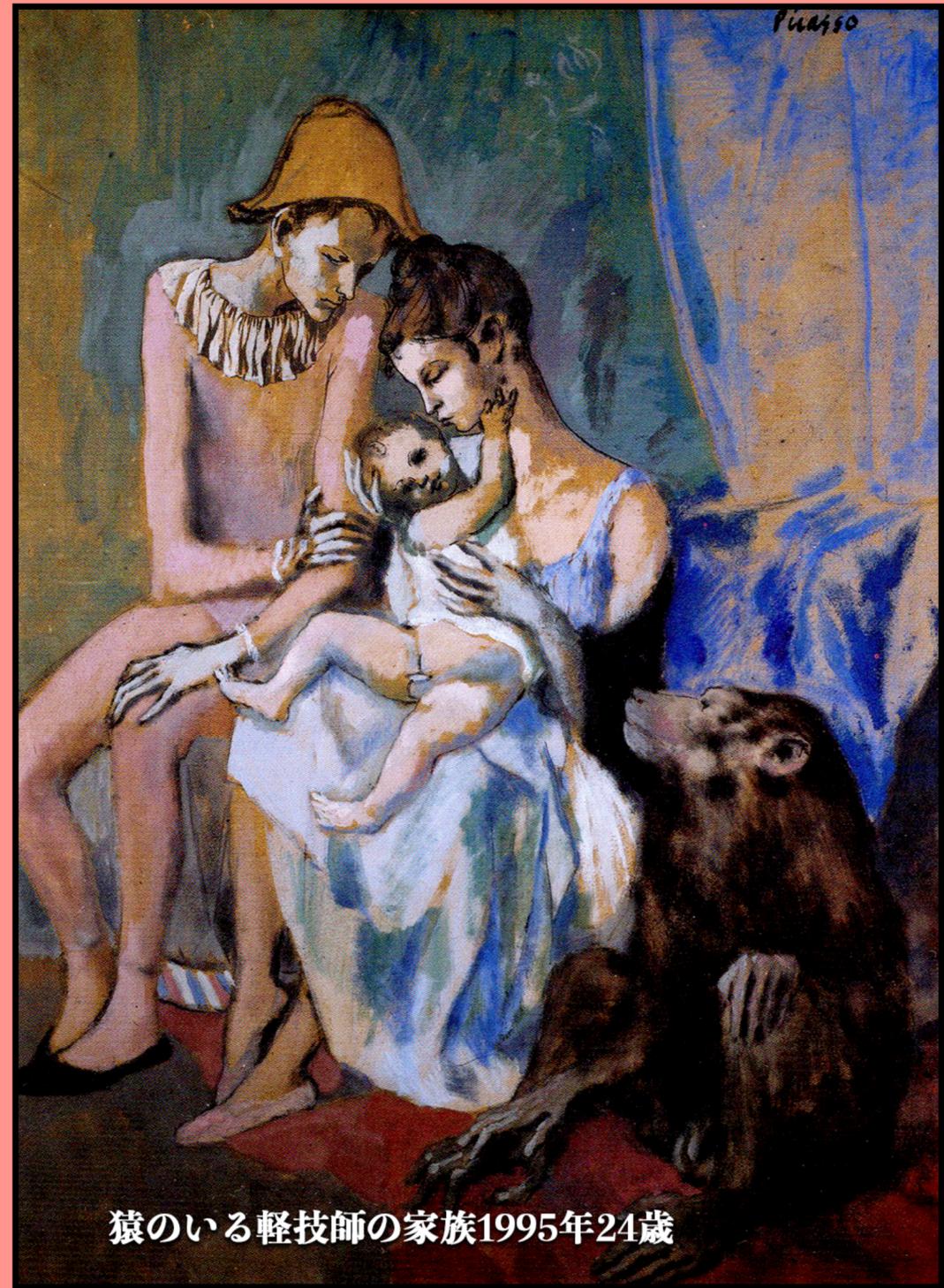
○形態については、腕を逆L字型にして平行に配置することや、まさぐる右手、持つ左手、頭部と身体的位置関係などを、ややデフォルメをしています。これにより、作品の主題をわかりやすくしているように見えます。ピカソが対象の本質をとらえるために、「年老いたギター弾き」と並んで、形の重要性の指向を強くした作品といわれています。



(二人の姉妹) 1902年(21歳)  
ミタージュ美術館、パブロ・ピカソ 青の時代

# ③-1・(1904~1906年・23歳~25歳)「バラの時代」

家族の優しさや愛情が、淡く優しい色彩とともに画面に染み込んでいく



猿のいる軽技師の家族1905年24歳



洗濯船

## ●ピカソとこの時代の出来事

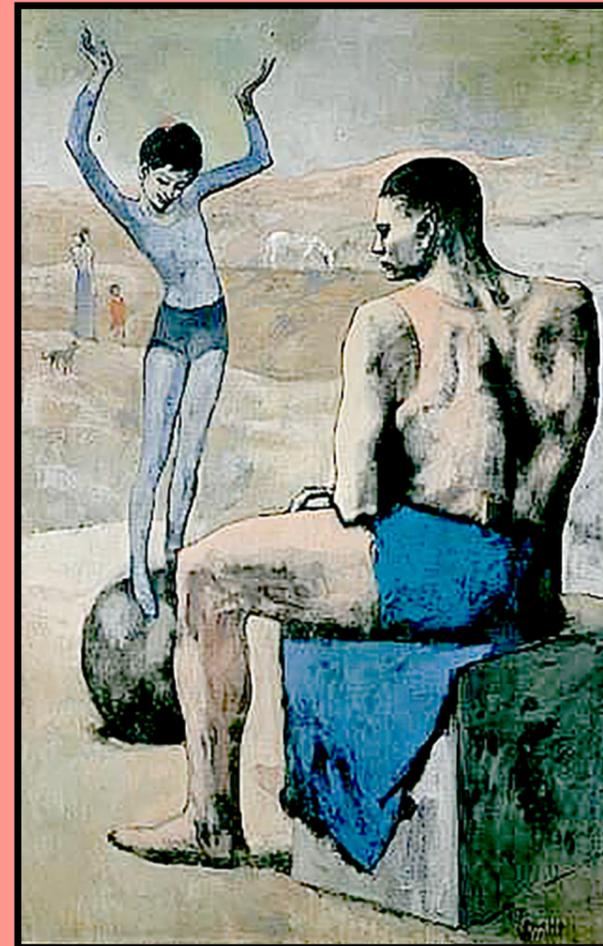
- 1904年 ● モンマルトルのラヴィニャン通り13番地、通称「洗濯船」に居を構える  
● **23歳** フェルナンド・オリヴィエと知り合い恋仲に  
    **日露戦争勃発**
- 1905年 ● アポリネールや、アメリカ人コレクターのスタイン兄妹と知り合う  
● **24歳** オランダを旅行  
    **サロン・ドートンヌにフォーヴ登場**
- 1906年 ● ルーヴル美術館のイベリア彫刻の展覧会に感銘を受ける  
● **25歳** アンリ・マティスやアンドレ・ドランと知り合う  
    恋人フェルナンドとバルセロナの両親を訪ねる  
    ピレネー山脈南部の小村ゴズルに滞在  
    **セザンヌ死去**

○ <猿のいる軽業師の家族>1905年24歳・・・バラ色の時代、ピエロやアルルカンたちは舞台裏で家族との温かい愛情に包まれる。

○ モンマルトルの丘の中腹、「洗濯船」と呼ばれる建物にアトリエを構えたピカソは、極貧そのものの生活を送った。冬の寒さは厳しく、夜に飲み残した紅茶が翌朝には凍っていたという。ストーヴにくべる石炭も買えず、フェルナンドは靴がないため長期間、外出できないことさえあった。絵具や画材はおろか、その日の食事にも事欠く有り様だったものの、生活そのものは活気と才気にあふれるものだった。また、フェルナンド・オリヴィエと知り合い、生活を共にするようになる。

## ③-2・(1904~1906年・23歳~25歳)「バラの時代」

流浪のサーカス団は、荒涼とした大地に何を思うのか



○ 《玉乗りの曲芸師》(1905年)・・・モンマルトルのメドラノ・サーカスの芸人たちを題材とした作品である。画材不足のため、別の肖像画のキャンバスに上から描かれている。前景には屈強な男が配置されるが、その表情は陰鬱で、生活に満足していない様子にじむ。対照的に、玉の上で軽やかに立つ女性は明るく、自由で幸福を体現している。その姿は男性を手玉に取るようにも見え、**肉体の重苦しさと精神の軽やかさの対比**を際立たせている。ピカソが追い求めたのは**力や肉体ではなく、日常の重さを超えて生きる「心の自由」**であり、この絵はその思想を象徴している。

○ 《サルタンバンクの一家》・・・青一色で染められていたピカソの作品は1905年頃24歳から明るい色彩を取り戻していく。、「バラ色の時代」を代表する作品だ。逸話的な背景や細部の描写を排除した古典的な表現で、アルルカンや旅芸人といった社会の周辺に疎外された者たちを叙情的に描き出している。花籠を持つ少女や、彼女と手をつなぐアルルカン、丸々と太った道化、2人の軽業師の少年、そして右端に座る女性は、互いに視線を交わすこともなく、時間を超越した永遠の沈黙のなかにたたずむ。

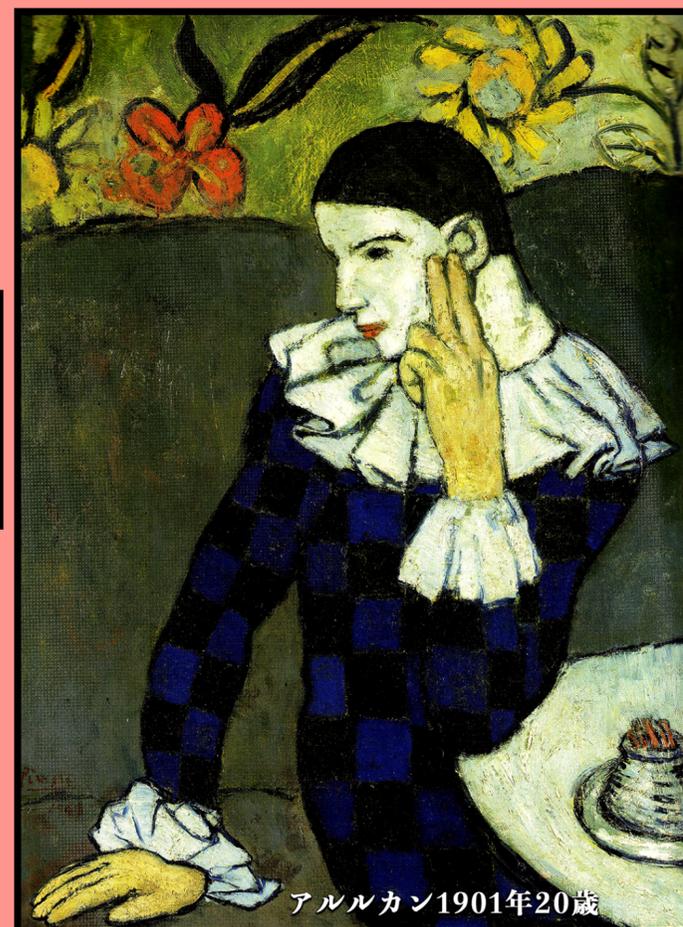
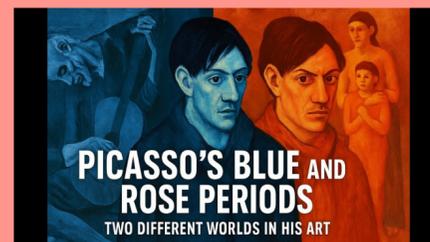
# ③-3・(1904~1906年・23歳~25歳)「バラの時代」

パイプを持つ少年1905年24歳



パイプを持つ少年1905年24歳

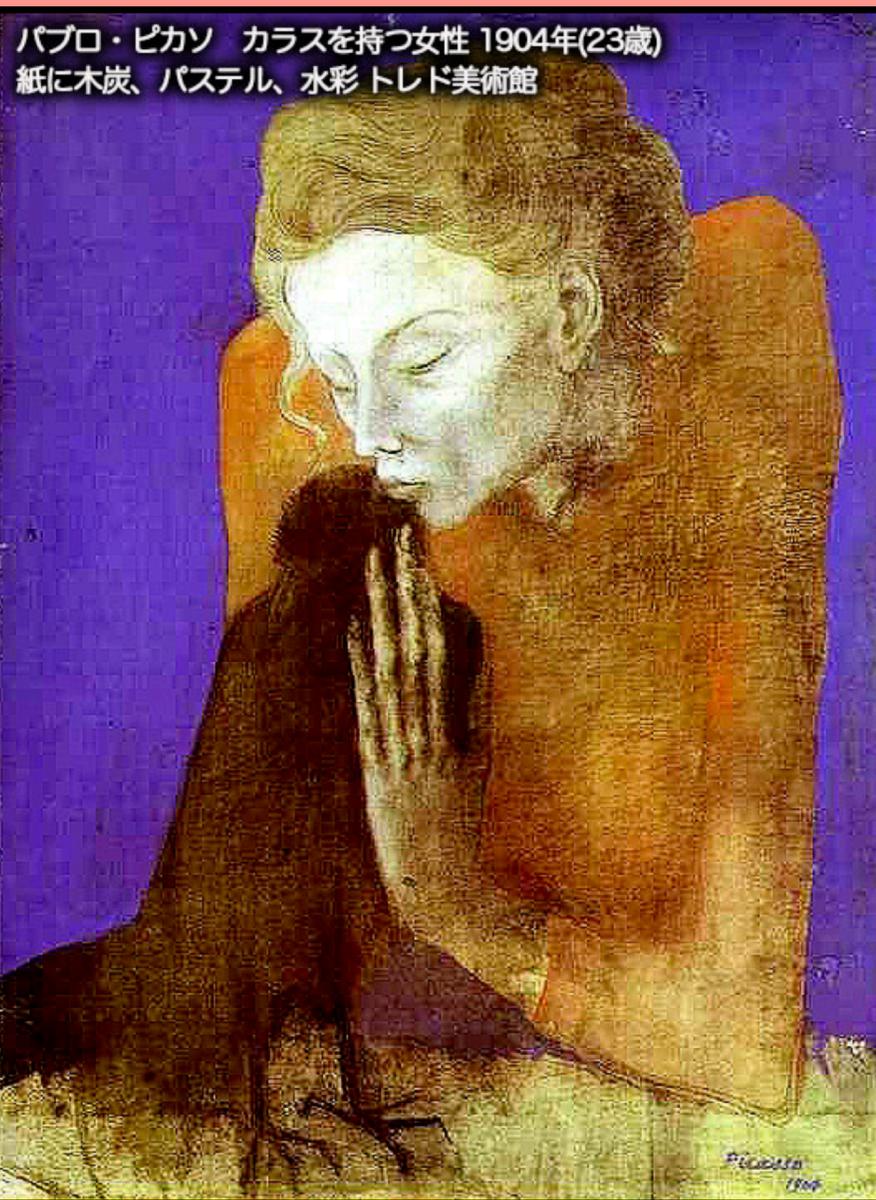
○ピカソ芸術は、その時期に特徴的な描き方によって名称が付けられ、分けられているが、必ずしも線的な発展を辿ったものではない。《パイプを持つ少年》と1901年に描かれた「青の時代」の作《アルルカン》を比較してほしい。画面全体を覆うものう物憂い雰囲気、背景に描かれた花の装飾、服装の平面性など、多くの共通点があることに気付くだろう。左手にパイプを持ちながら正面を見据える少年は、焦点が定まらない視線を虚空にさまよわせる。均整のとれた構図や柔らかな色調が、正面を向く少年の存在感、威厳を緩和し、鑑賞者を甘美な世界へと誘っている。



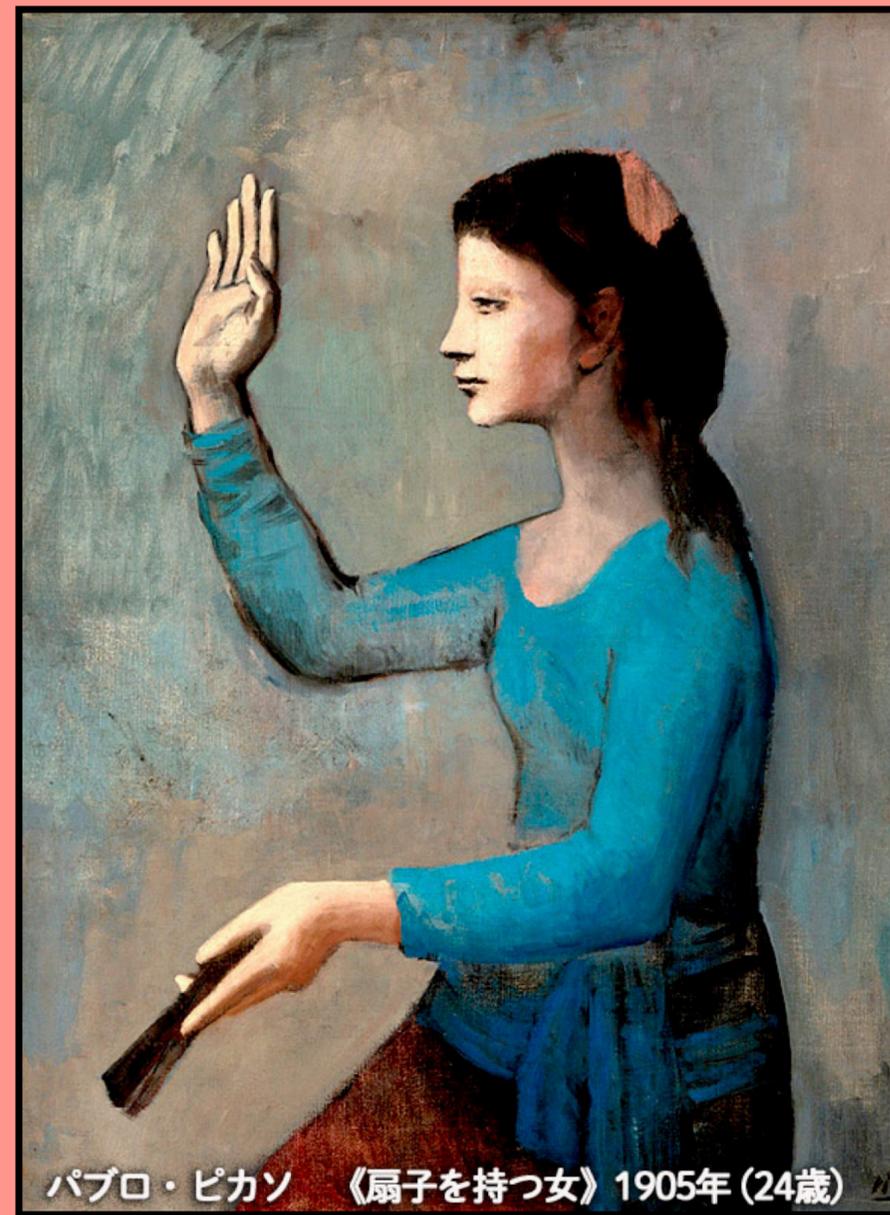
アルルカン1901年20歳

○ピカソ20歳の時の作品・・・ピカソの絵のなかにはしばしば登場するアルルカン（道化師）を描いたものも初期の1点で、市松模様の衣装と飾り襟が特徴的。「青の時代」には、こうして1人あるいは2人でテーブルについている人々も頻りに描かれている。表情は硬く、喜怒哀楽は白塗りの顔の奥底に隠されているにもかかわらず、うつむき加減の顔に添えられた手や、身をよじって横を向いているしぐさが物憂い雰囲気や、身をよじって横を向いているしぐさが物憂い雰囲気を伝える。しかし一方で、19世紀末フランスの装飾様式「アール・ヌーヴ」から発想を得ているように思われる、頭上の大ぶりな花模様が、ピエロの装飾的な服とあいだに見事な均衡を保って絵に華やかさを与えている。ここには、「青の時代」の思索的な人物表現に、華麗な装飾性という別の要素を加味した実験の跡がみられる。

# ③-4・(1904~1906年・23歳~25歳)「バラの時代」



## 薔薇の時代



- カラスを持つ女・・・1901年から青の時代が始まり1904年、パリ移住で終わり。1905年薔薇色の時代が始まりますが、この絵はちょうど移行期の作品。背景はブルーで衣服はオレンジ、色彩的には華やかになってきていますが、そこに描かれている世界は、まだ青の時代のメランコリーな雰囲気漂っています。この時代色彩の変化だけでなく、技術的にも大変進歩していて、まず線が鋭いと言うかシャープになり、髪の毛や手そして目の表現が繊細で、構図から画面全体のあらゆる細部まで神経が行き届いています。

- 扇子を持つ女・・・顔は真横から捉えられているが、上体はわずかな角度がついている。肩の高さで前に出した右腕は、肘から下をほぼ直角に上げ、指を立てて掌を見せている。左腕は肘をほぼ直角に曲げて前に出し、閉じた扇子を持つ手は、手首から約45度下に曲げられている。日常生活において、このような腕の形をとることはないため、一種異様な印象をもたらす。

●ピカソとこの時代の出来事

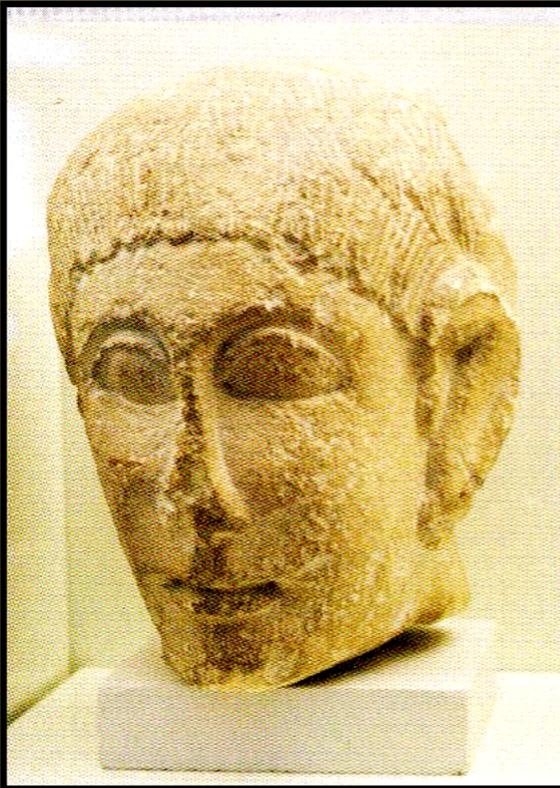
- 1907年 ◆ 《アヴィニヨンの娘たち》を制作  
26歳 アポリネールの紹介でブラックと知り合い、キュビズムの探求へ向かう  
セザンヌ回顧展
- 1908年 ◆ アンリ・ルソーを称える晩餐会が  
27歳 ピカソのアトリエで開かれる
- 1909年 ◆ 分析的キュビズムが始まる  
28歳 夏のヴァカンスをオルタ・デ・エプロ(現オルタ・ダ・サン・ジュアン)で過ごす  
クリシー大通りに引っ越す
- 1910年 ◆ カダケスで夏のヴァカンスを過ごす  
29歳
- 1911年 ◆ エヴァと知り合う  
30歳
- 1912年 ◆ 初めてのコラージュ作品を制作  
31歳 ラスパイユ大通りに転居する  
カーンワイラーと契約を結ぶ
- 1913年 ◆ 父ホセが死去  
32歳 総合的キュビズムが始まる  
シェルシェール通りに引っ越す  
アポリネール『キュビズムの画家たち』出版
- 1914年 ◆ 投資家グループ、ポード・ルルス  
33歳 (熊の皮)のコレクションが競売にかけられる  
第一次世界大戦勃発  
ブラックとの共同制作に終止符が打たれる
- 1915年 ◆ 恋人エヴァが早世  
34歳
- 1916年 ◆ モンルージュへ引っ越す  
35歳 ジャン・コクトーの紹介でディアギレフや作曲家サティと知り合う

# ④-1・(1907~1916年・26歳~35歳)「キュビズム時代」

## 絵画史の流れを根底からくつがえした英雄的革命



ガートルード・スタインの肖像1905年25歳



男性頭部 古代イベリア彫刻、紀元前4世紀頃  
セーロ・デ・ロス・サントス出土 マドリド、国立考古学博物館  
明快な目や耳、短い髪、端正な顔だちの古代イベリア彫刻は20世紀初頭にルーヴルで展示され、ピカソの靈感源となった。



20世紀初頭 アフリカの象牙海岸、クル族のマスク。  
木に彩色 80×24×13cm パリ、ピカソ美術館

○ 〈ガートルード・スタインの肖像〉1906年25歳・・・ピカソは1905年にスタイン兄妹と知り合い急速に交流を深めていく。当時スタインの住まいは、パリに住む前衛芸術家たちのサロンとなっていた。ガートルードはピカソ作品のコレクターとなり、もとは浮世絵などが飾られていた自宅の壁を、ピカソやマティスの作品で埋め尽くしていった。

○ 悪魔祓いの絵・・・一度は黒人彫刻の影響を否定したピカソだったが、のちにアンドレ・マルローに《アヴィニヨンの娘たち》の誕生を述懐している。「私がトロカデロに行ったとき、ひどい匂いで逃げ出したいとぞと思った。だが踏み留まり、それが極めて重要なものだと気付いた。その仮面どもは並みの彫刻ではなかった。魔術的なものだったのだ。黒人芸術は媒体者だった。《アヴィニヨンの娘たち》はその日に着想されたはずだ。でも、フォームが理由じゃない。なぜなら、それは私の最初の悪魔祓いの絵だったからだ」。

## ④-2・(1907~1916年・26歳~35歳)「アヴィニョンの娘たち」

アヴィニョンの女たち1907年26歳



○ 20世紀芸術の開幕を告げる記念碑であり、**モダン・アートの方向性を決定づけた問題作**。ここに描かれた裸婦は醜く、優美でも官能的でもない。彼女たちのデフォルメされた顔や肉体は、ルネサンス以来の伝統的な美学への挑戦である。同時に、**ヨーロッパ中心主義的な文明観への異議申し立ての芸術である**。古典的な人体の規範を壊し、三次元性を無視し、人体は自由に再構成された。この絵は何枚ものデッサンや習作を重ねて辿り着いた「**試行と実験の場**」（美術史家アルフレッド・バー）である。こうしてピカソは**造形革命の新たな地平に立つ**。その地平とは、画商のカーンワイラーが言うように、「**もはや対象の模倣ではなく、それを意味するひとつの記号の発見**」だったのである。

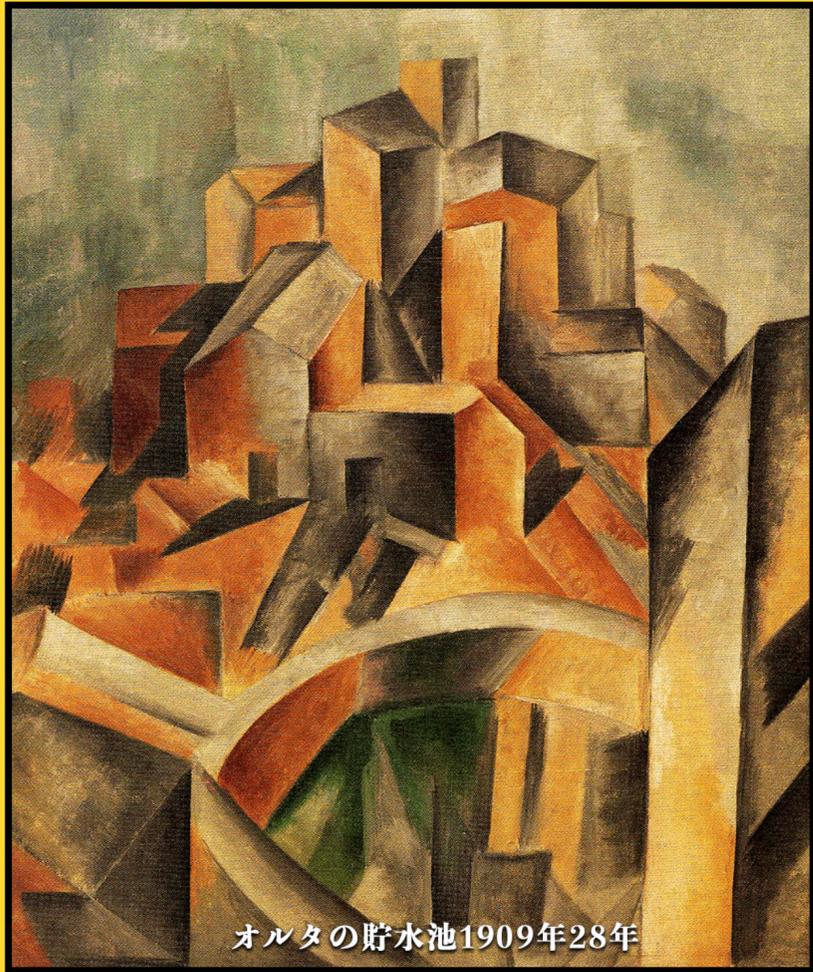


アヴィニョンの娘たち周作1907年26年

○ ピカソが、「最初はアヴィニョンの売春窟、と呼んだものさ」と告白したように、1907年早春に始まる初期の構想は教訓的な寓意画で、画家自身の体験による港町バルセロナの歓楽街、アヴィニョー通りでの思い出から出発する。それは前年の《ハーレム》の概念の発展であり、5人の売春婦と客である水夫が、西瓜と酒瓶ボロン、花瓶が置かれた室内にひしめき、若い医学生がそこを訪ねるといふ逸話風の設定であった

# ④-3・(1907~1916年・26歳~35歳)「オルタの貯水池」

積み木をを重ねたような幾何学的キュビズムの代表作



オルタの貯水池1909年28年



『十字架を持つ少女』(1911-1912) ブラック キンベル美術館

CURIOS MUSE

## CUBISM

Explained

わかりすぎる 抽象絵画研究/全31回  
美術講義 キュビズム? 2-2

### 研究開発



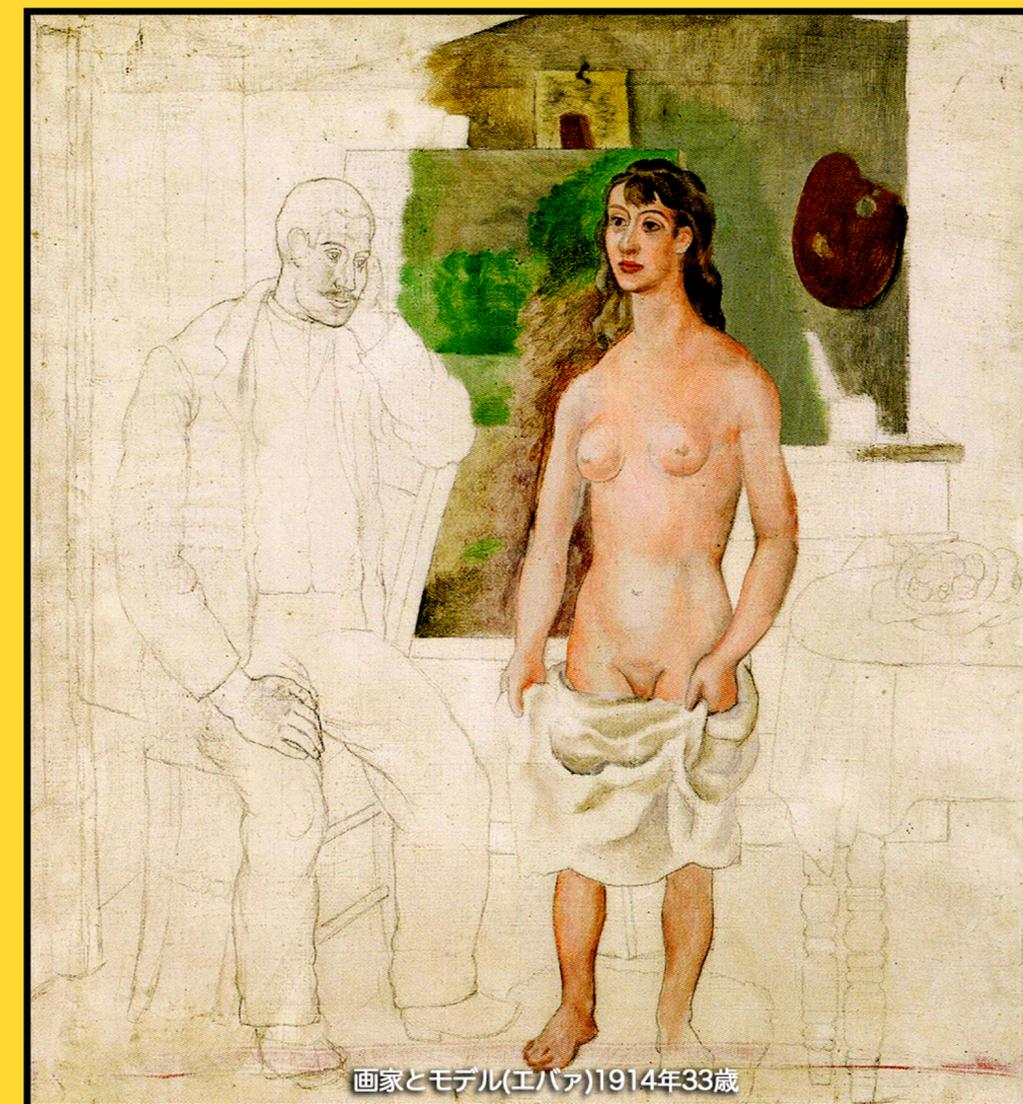
ヴォラールの肖像1910年29歳

○ ピカソはオルタの街並みを描き出すにあたって、線遠近法を部分的にしか適用せず、まるで積み木を重ねあげるようにして画面を構成している。実際の太陽光とは無関係に影が付けられ、曲線が用いられているのは貯水槽の輪郭だけだ。このように立方体を積み重ねるような描き方は「幾何学的キュビズム」と呼ばれている。オルタに滞在している間、ピカソは「幾何学的キュビズム」から、描かれる対象が直線の組み合わせのなかに分解されていく「分析的キュビズム」へと歩を進める。

○ 人物が割れたガラスのように断片化されているものの、頭部だけはモデルが誰なのかを識別できるように、入念に構成されている。制作された時期と、モデルが画商であることが重要な意味をもつだろう。1910年の時点では、市場ではキュビズム絵画の需要が確立していなかったからだ。そしてキュビズム作品の売り出しに決定的な役割を果たすことになるのが画商という存在だった。

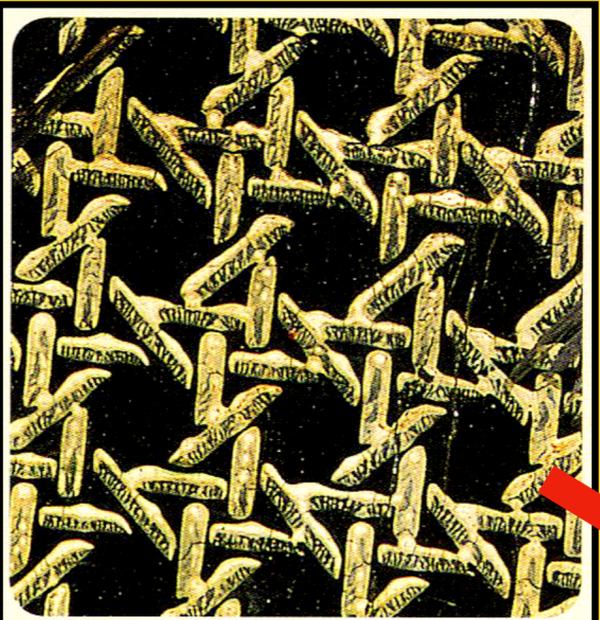


○ **キュビズム**は、感覚に訴える印象派と対極に位置し、**知覚に訴えることを意図した絵画**であるといえるだろう。描かれる対象は、それが人物であれ静物であれ断片に分解され、画面上に再構成される。画家が「**視覚を通して捉えた世界**」を描き出すのではなく、「**知覚を通して捉えた世界**」を描き出すのである。ひとつの物体でも、見る角度によって、違った形をもっている。そういう知識を同じ画面上で組み合わせることによって作品が作り上げられていくというわけだ。この作品で注目すべき点は、**画面下部に文字が書き込まれていること**である。ピカソは流行歌の一節「**マ・ジョリ（私の愛しい人）**」を恋人エヴァに捧げる**言葉**として画面のなかに取り込んでいる。鑑賞者が画面構成の各部分をただ見るだけで満足するのではなく、文字とともにひとつひとつ読み解いていくように促しているのだ。

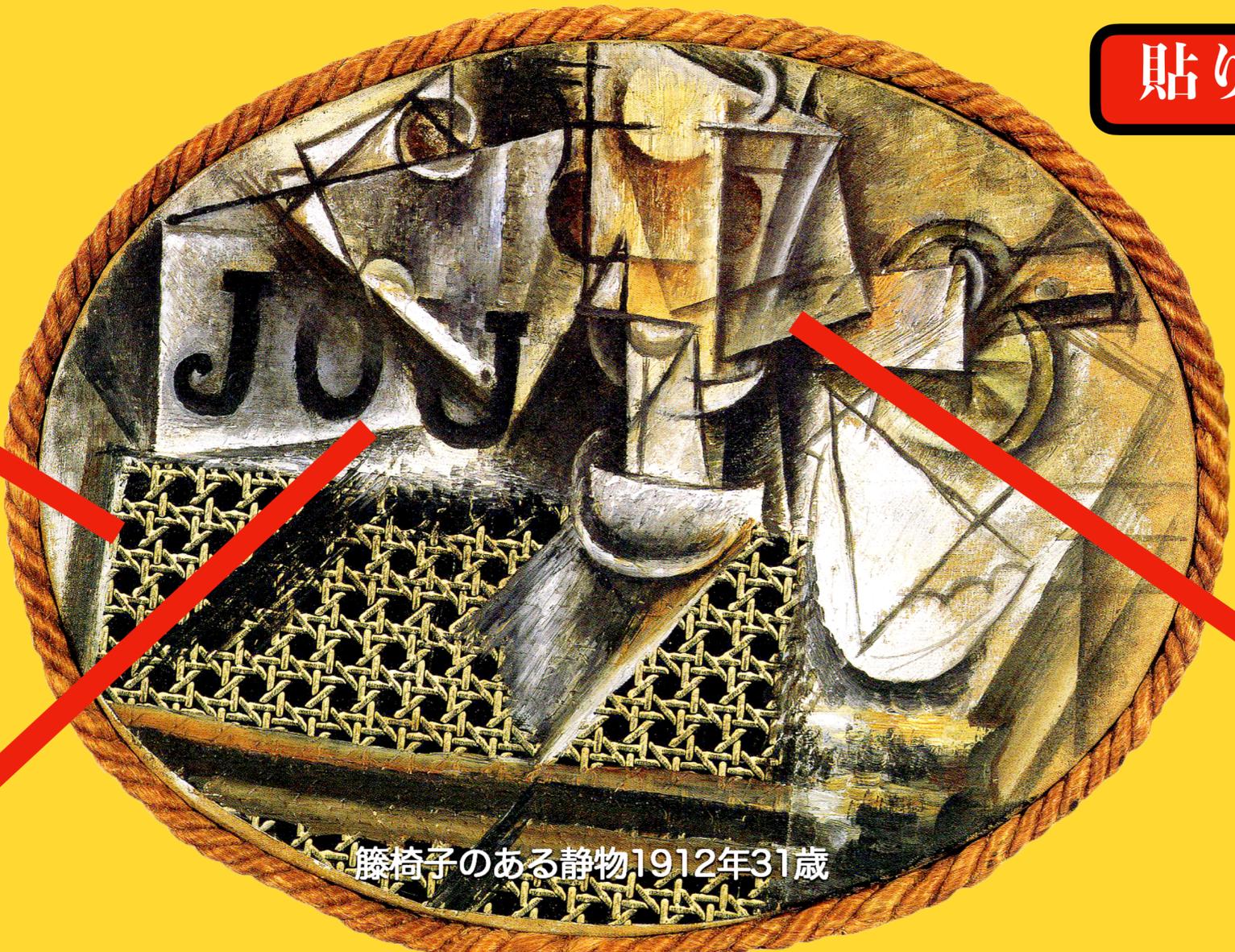


○ 1914年の初夏、恋人エヴァ・グエルと南仏の古都アヴィニョンで滞在中に制作された。第一次世界大戦の勃発で戦場に赴くブラックやドランを駅に見送った頃である。画面で二人の視線は出会わず、憂愁と孤独が漂うのは**恋人が重病に侵されていた**からだろう。男の凝視は若く美しい女の姿形を記憶に刻もうとしているかのようだ。生前は一度も公開されず、画家の死後に明らかにされた**ピカソ秘匿(ひとく)**の絵である。

④-5・(1907~1916年・26歳~35歳)「藤椅子のある静物」

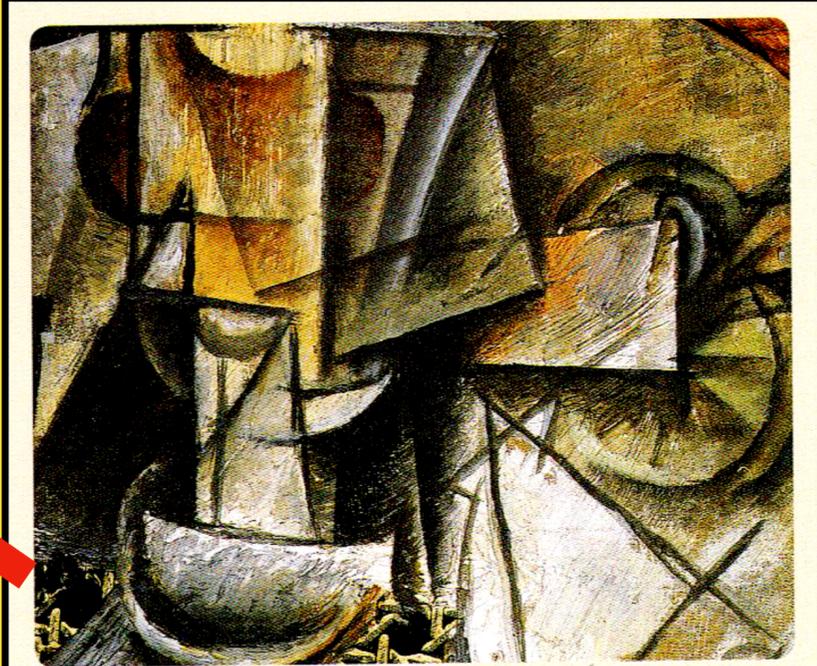


POINT ③ 異質な要素を並置  
籐細工に見える部分は模造で、編み目模様を印刷した油布が貼り付けられている。



藤椅子のある静物1912年31歳

貼り付けられた現実の断片



POINT ① 混在する手法  
椅子の上に置かれた透明なグラスや輪切りのレモンなどは分析的キュビズムの手法で描かれている。

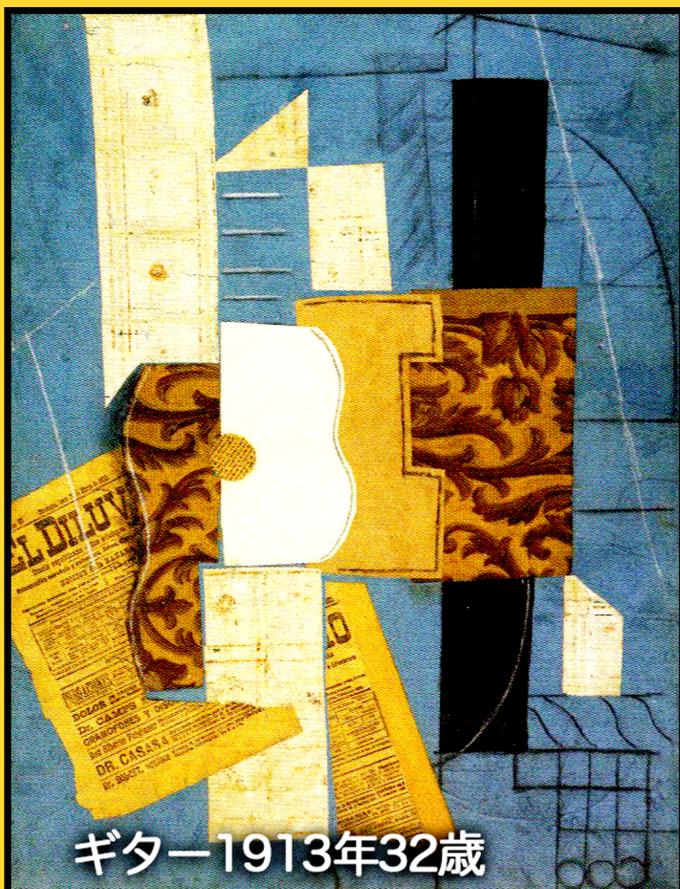


POINT ② 現実性を画面に  
新聞を表す JOURNAL の一部が JOU の 3 文字として画面左上に書き込まれている。

○ 《藤椅子のある静物》1912年31歳・・・分析的キュビズムの手法で描かれたグラスやナイフが、藤細工の模様が印刷された模造紙や文字で指し示された「新聞」と同じ画面に共存している。つまり、絵画は絵画のみで構成されるという暗黙の了解を破壊して、**絵画と工業製品と広義の文学が、ひとつの画面に混在していることになる。**楕円形の枠をぐるっと囲む荒縄は、従来は共存しなかったはずの**異質な要素がバラバラにならないよう、画面をぎゅつと引き締める役割**を果たしている。こうして、絵筆や絵具に加え、のりハサミや糊が作品を制作するために使われる道具となった。画面に模造紙、荒縄を貼り付けるコラージュが初めて使われた画期的な作品である。

# ④-6・(1907~1916年・26歳~35歳)「居酒屋」

キュビズムの画面によみがえる色彩



ギター1913年32歳

○ギター (エル・ディルビオ)  
1913年32歳・・・1913年3月引日付のバルセロナの新聞『エル・ディルビオ』(大洪水の意味)が貼り付けられている。単にパピエ・コレの手法が用いられているだけでなく、容態が悪化した父を見舞うため、ピカソが滞在先のセレから、国境を越えてバルセロナに赴いていたことを示す作品でもある。父ホセ・ルイス・ブラスコはこの年の5月3日に亡くなる。



居酒屋1914年33歳

○総合的キュビズムの時代、パピエ・コレやコラージュといった技法によって現実の断片が画面に取り込まれるとともに、分析的キュビズムの時代には影を潜めていた色彩がよみがえってくる。これによって親しみやすさが増すこととなる。描かれているモチーフも新聞やフォーク、レモン、瓶、楽器など日常生活のなかで見かけるものばかりである。このような画面なら、難解に見えるキュビズムも身近なものとして感じる事ができるだろう。



POINT ① 身近なモチーフ

キュビズムで描かれる静物は身の周りにあるものが多い。瓶や新聞はとくに頻繁に描かれた。

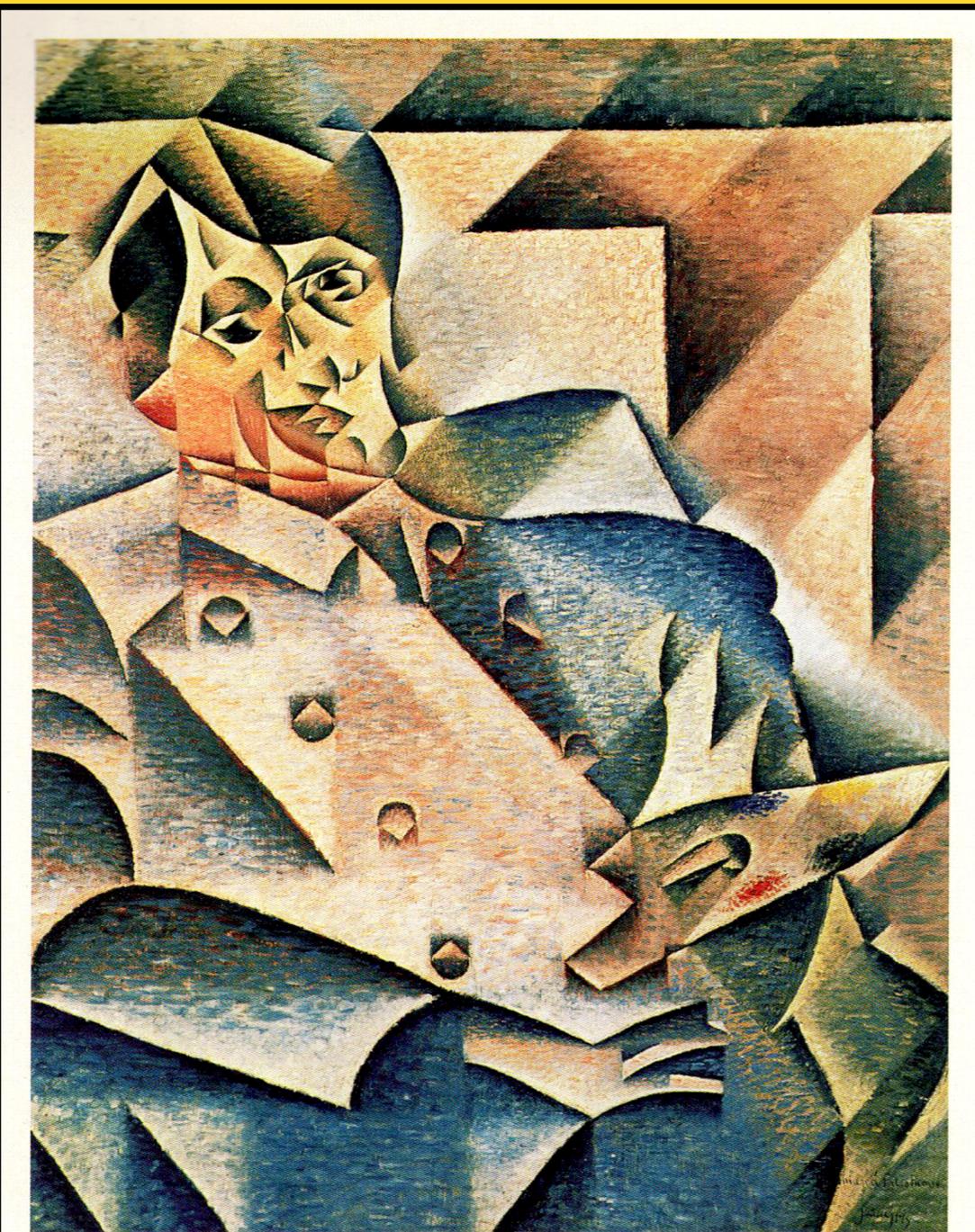


POINT ②

居酒屋の  
雰囲気  
を醸し出す

はっきりと識別できるように描かれたナイフやフォークから、この画面が乱雑に散らかった居酒屋のテーブルであることがわかる。

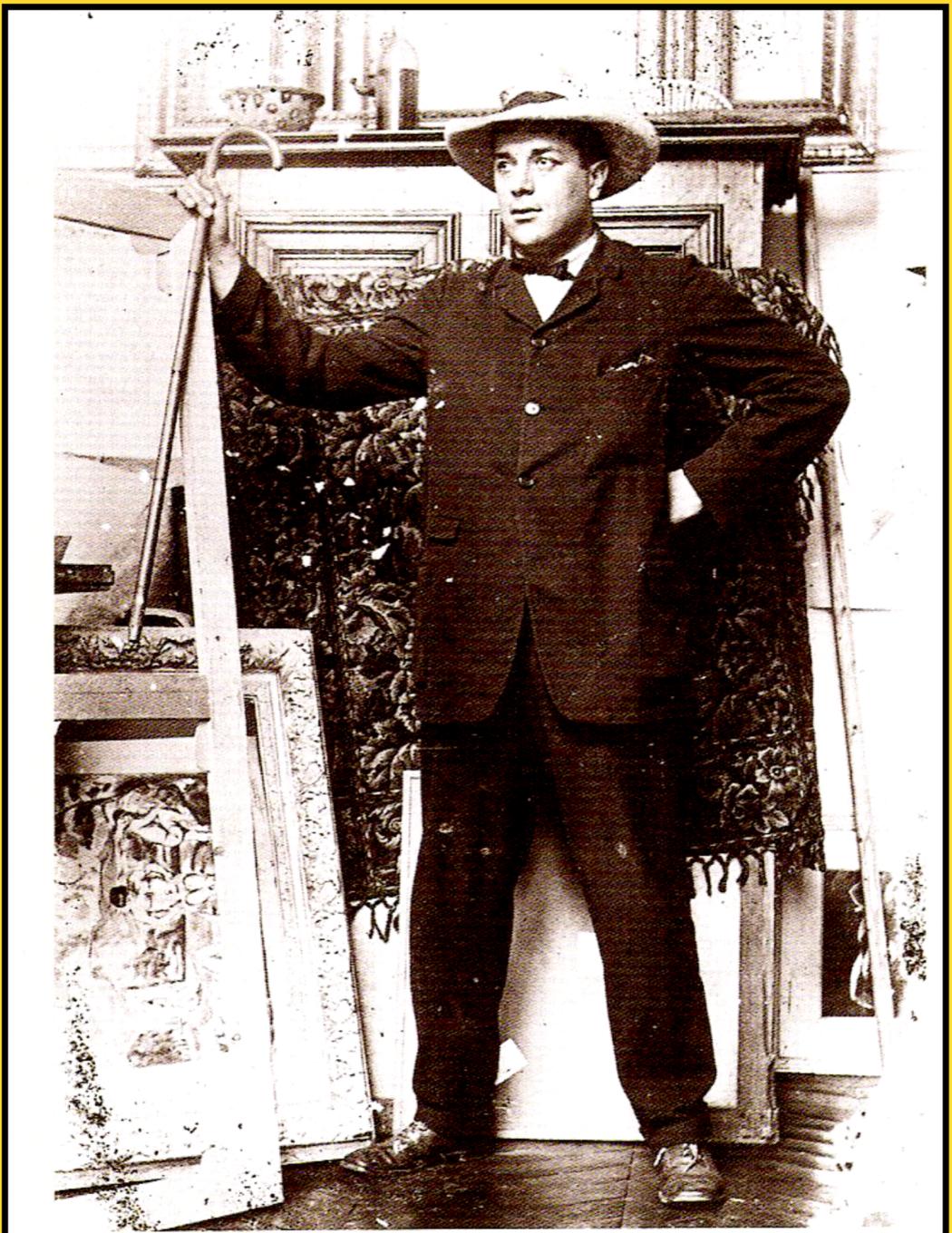
④-7・(1907~1916年・26歳~35歳)「キュビズムという革命」



フアン・グリス《ピカソへのオマージュ》  
1912年 油彩 93×74cm アート・インスティテュート・オブ・シカゴ  
フアン・グリスは1912年、キュビズムの創始者であり同国人であるピカソに敬意を表する作品《ピカソへのオマージュ》をサロン・デザンデパンダンに出品し、公式デビューを果たす。



ピカソのアトリエ



ピカソのアトリエでポーズをとるブラック(1910年頃)。のちにブラックは、この頃のピカソとの関係を、「2人は1本ザイルで結ばれた登山者」のようだったと回想している。

キュビズムは世界にどう影響していったのか？

WHAT IS...



CUBISM



日本におけるキュビズムーピカソ・インパクト

(埼玉県立近代美術館)

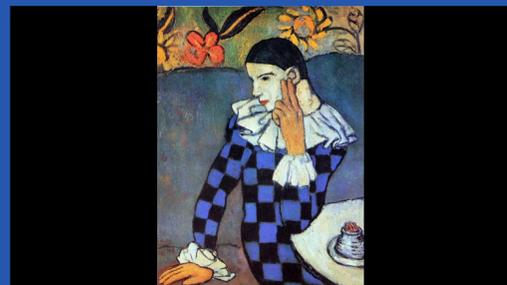
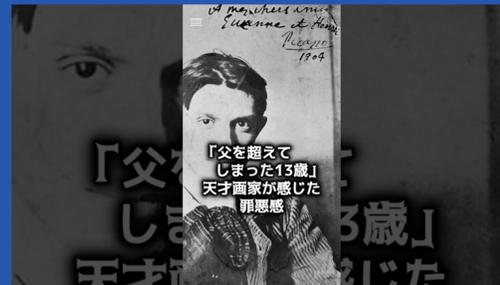
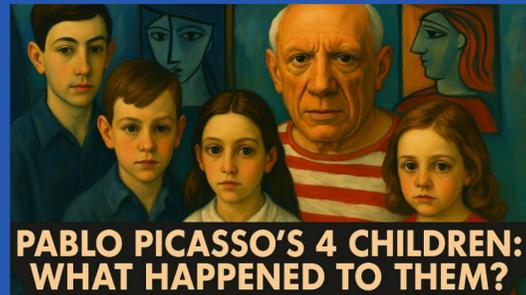
日本における  
キュビズム  
—ピカソ・インパクト

CUBISM in JAPAN  
Picasso's Impact

2016年11月23日(水・祝)

～2017年1月29日(日)

# YOUTUBE



## ○ 今日のテーマ

「若きピカソは、いかに現実を直視し、新たな表現を生み出したのか」についていかがでしたか。ご感想をお願いします

○ 次回のテーマのご要望を承りますので忌憚なくお話しください。